

求道

第拾七卷
第壹號

二 月 號

獨斷思想の危険と無定見の害毒

親鸞聖人の絶對信——眞之善知識——

——『歎異鈔』第二章の意義——

眞佛顯現の本源——眞佛土卷講話——

爭鬭と解脱

大正十年二月二十日發行（毎月一回發行）

獨斷思想の危険と無定見の害毒……………(一)
親鸞聖人の絶対信——眞之善知識……………近角 常觀……………(四)

- 一 私「救異鈔」の御縁
- 二 「救異鈔」二章
- 三 「別の仔細なし」
- 四 池山氏及びその夫人の實驗
- 五 聖人の吉水入室
- 六 法然上人の撰撰木願念佛の教
- 七 法藏因位の本誓
- 八 善し惡しいふてゐるのが最もいかぬ
- 九 念佛主義の發生
- 一〇 同情の内容
- 一一 永劫修行の眞意義如何
- 一二 満足の源泉と夫より來る信仰的態度
- 一三 佛の無食、無願、無礙
- 一四 相對善、絕對善
- 一五 弘願眞宗
- 一六 眞之善知識
- 一七 法然上人の仰せが即ち佛の御眞實
- 一八 内愚外賢
- 一九 眞佛顯現の本源——眞佛土卷講話……………近角 常觀……………(三)
- 第一 講(承前)
- 悲の誓願に酬報するが故に
- 第二 講
- 一 光明壽命の願
- 二 清淨、歡喜、智慧光佛
- 三 平和問題解決の妙案
- 四 總ては佳分を見て下された結果なり
- 五 眞意柔軟
- 六 諸佛歡喜
- 七 「異譯」光明讚歎の文
- 近角 常觀……………(四八)
- 一 人生の争闘
- 二 解脱の信味
- 三 人格の收斂

- 毎日曜午前九時
- 毎土曜午後七時
- 毎月十五日午前九時慶信會
- 毎月二十八日午後七時鸞聖會
- 求道會館
- (木郷區森川町一番地)
- 第二求道會
- (九段坂佛教俱樂部)
- 毎月二十七日午後七時
- 第三求道會
- (日本橋區淺草町説教所)

獨斷思想の危険と無定見の害毒

○思想問題に於て最も危険なるは、獨斷的に自己を絕對に正義なり忠誠なりと、自分ぎめをすることである。常に私は言ふ如く、人間は決して絕對なるものでない、從て何人も絕對に正確なりと獨斷することは、其こと自身が既に大なる間違である。詳しく言へば我こそ正確なりと獨斷することが、既に正確でないことに想到せねばならぬ。聖徳太子が人皆心あり、心各執るところあり、彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり、我必しも聖に非ず、人必しも愚に非ず、共に是れ凡夫耳と宣へるは實に萬古不磨の確言である。

○近時重大事件として人世を聳動したる出來事の如きも畢竟するに自己を以て絶対に忠誠なり、正確なりと自認せるより起りたる誤謬である。既に自己を以て絕對に正確なりと獨斷せる結果、之を以て他に對して強行して憚からず、其極狂暴に陥るも敢て反省省察するの余地を存せざるに至るのである。

○勿論此見方は余程善意を以て解釋したるものにして其間何等自ら顧みて疚しき所なきものと假定するも、自分の考を以て絕對正確なりと過信すること自身が頗る危険なる思想である。律法主義、官僚主義の思想は出立點に於て此大なる誤謬に陥りて居る。故に横車を推せば唯すほど、益々常規を逸することになる。此點に於ては、是非之理、詎ぞ能く定むべけん、相共に賢愚なること、環の端なきが如し、是を以て彼人曠ると

雖、還て失を恐れよ、我獨り得たりと雖、衆に従て同じく擧へとの聖訓を服膺せねばならぬ。

○此誤謬は官僚主義、軍閥主義が陥るのみならず、米國の人道正義を以て自家の專賣の如く考ふる事が、如何に他國に迷惑を與へたかは、明らかなる事實である。何んとなれば其人道正義其物が、自國の立場を以て自分ぎめしたものである。全體私自身が信仰に入るとき、我は正しいといふて他を斥くるといふことが、既に正しいことでない事に氣が付いたのが、煩悶の根底であつたのである。何んとなれば私が私を以て正しいと考へる如く、他人は同様に自分を以て正しいと考へるであらう。すれば畢竟何人も自己を中心として正しいと考へる事が、人生に是非善惡の争を惹起する原因であらねばならぬ。今日の社會問題も勞働問題も、皆自己を中心として是非善惡の争を擴大したる現象である。自己こそは正しいと獨斷すること自身が既に大誤謬たることを自覺するに非ざれば、恐くは思想問題を

解決するの鍵を見出すことは出来ないであらう。

○此の如く各自己、を正しいとすること自身が正しからぬとすれば、人生一として正しいことはないことになる。すれば畢竟人生は如何にしてもよいといふことになる。右するも可なり、左するも可なり、極端に言へば御都合主義である。日和見をきめ込むやうになる何んでもよし主義である。結局無定見に安んぜねばならぬ。現内閣の如きはたしかに此見地を取るものと言はねばならぬ。故に成行に放任して其間に自己の活路を見出さんとする、頗る狡猾不眞面目なる態度に陥るやうになる。所謂是非非主義の如きは最も巧妙なる御都合主義の標語と謂つべきである。併是亦善意を以て解釋すれば必しも狡猾なるか爲めと言はんよりも、無定見の結果必然の成行と見ねばならぬ。要するに人生皆絶對正確といふものなしとすれば、是非ともかくせねばならぬといふ確然不動の眞理なるものは存せぬことになる。

○自分ぎめの正義が頗る危険なる如く、無定見に物事を進行することも大なる害毒と言はねばならぬ。且つ無定見は如何なるものも認容することが出来るのであるから、彼自分ぎめの正義と妥協することも出来るのである。此に至りて害毒も甚しといふべきである。而して形勢非なりと見るときは忽ち正反對の説に乗り換へることも出来るのである。かくて人生は無秩序の渾沌となるであらう。

○然らば此渾沌界を如何にすべきか、此間に如何にして秩序を見出すべきか、如何にして萬古不易の眞理を見出すべきか。煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておほします。此そらごと、たはごと、まことあることなき人生の中に、唯一まことの念佛を如何に見出すかといふが信仰問題である。

○抑そらごと、たはごと、まことあることなき人生

は、他まで相對是非の世界である。而して此まことあることなき人生を悲愴して、如何なる虛假不實の者と雖之を斥けたまふことなく、飽迄融和同化したまふ絶對眞實の大慈悲が如來である、念佛である、惟佛是眞の眞理である。如何なる無秩序の世界も、煩惱具足火宅無常の世界も、此絶對眞實の御親に遇ひたてまつりて、初めて確然不動萬古渝らざる眞理を見出すことを得るのである。然れども是れ自分ぎめの正義、我こそ正確なりとの獨斷に非ず、寧ろ自己は、そらごと、たはごと、まことあることなき者なれども、唯我を見捨てたまはざる如來の清淨眞實に攝取せられて、此に初めて歩々着々一糸も紊るべからざる人生々活の大道現前するものである。是れ即ち眞人生の實現と謂はねばならぬ。是絶對無碍の一道である。此に於てや天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなく、國家の基礎鞏固にして、世界の平和自ら來るべきである。

親鸞聖人の絶対信

『眞之善知識』

近角常觀

四

一 私が『歎異鈔』の御縁
之より聞いて頂かうと思ふのは、『親鸞聖人の絶対信』といふやうの意味にて、猶別には『眞の善知識』と題して置いた。要する處は聖人の信仰の至極を聞いて頂かうとするのであつて、それは即ち平日話す『歎異鈔』第二章の精神を充分味はせて貰つて見やうと思ふのである。

私としては此頃も、殊にこの第二章を有難く喜ばせて貰ふて居る。如何にもこの鈔は有難く、讀めば讀む毎に『斯ういふこともあつたか』と、金を掘り出す如き有難き聖教である。殊に第二章を述べさせて貰ふとなると、私としては深き昔の因縁が想ひ出されて来る。それは私の父が常にこの『歎異鈔』を讀んで居つたことを、子供心に私は眺めて居つたのであつた。言ふ迄

で讀んで貰はうが爲めであつた。それが今日の『信仰問題』の中に『親鸞聖人の信仰』なる見出しになつて遺つて居る。左程考があつて書いたものでも無つたが、

當時書き終らうとする處へ両親が京都から歸つて來られた。斯ういふものを書いた」と両親に示した處が、父は『それは有難いものが出來た』と、非常に喜んで呉れたものであつた。私が『も少し書く積りだ』と言ふと父は『これ以上書いては可かぬ、書く勿』と止められた。併し私は書き度いから書いて見た。するとそのあとがもう書けぬ。こんな筆は無いがと努めたが、其のあとがもう何うしても書けなかつた。その後之を當時の『求道』に載せ、諸方から禮言うて來て下れたがその一番初めに言うて來て呉れたのが私の徒弟——日露戦争で戦死したのが言うて來て呉れたのであつた。此頃『歎異鈔』が難有く思はせて貰ふに就け、私としては之等の因縁が想ひ出され、唯事ならず思はせて貰うて居ることである。

二 『歎異鈔』第二章

そこで今茲に『歎異鈔』をお聞き願はうとするに就け、私が今手にして居るは西洋に同行した友人、池山

もなく今日青年の間にこの鈔が行はれるやうになつたは清澤先生が、本鈔を青年の間に奨められたがもとである。が私としては父が少數の信者を小寺の御堂に集めては本鈔を讀み聞かせ、『……たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候』など、感に堪えぬ風にて話して居つたのを、『何うしてあれをあんなに喜ぶのか』と、眺めて居つたことを思ひ出すのである。又私が入信後にありては明治卅五年西洋より歸り、其の年御正忌に歸省して、両親に本山に參つて貰つた。そうして私は留守しながら、聊か御正忌を記念する心持ちにて、この第二章に簡単な文句を、書き加えたものを書いて居つた。一つは當時求道講話を始めて居つたので、私が歸國してそれが不在になる。即ちそれを送つて講話の席

榮吉君が喜びの餘り、獨逸語に翻譯されたものである。先づ初に第二章の全文を拜讀して見やう。

各十餘箇國のさかひをこえて、生命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころ、さし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにく、おぼしめして、おはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば南都北嶺にも、ゆゑしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとく、にもあひたてまつりて、往生の要、よくよくきかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり念佛はまことに淨土にむまる、たねにてやはんべらん。また地獄におつる業にてやはんべらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはけみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして、地獄にもおちてさふらは、こそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説

まことにおはしますば、善導の御釋盛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごととならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮するところ、愚身が信心にきてはかくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと云々。

寧ろ私が要らざる言葉を加えずに、これ丈けを拜讀した方が有難い。之れ丈け拜讀した上に親鸞聖人の絶對信の有様——法然上人の仰せを有難くその儘頂かれたる、聖人の絶對信の有様が、十二分に表はれてある。猶ほ外に『執持鈔』とて、覺如上人のものされたものがある。之が亦有難き聖教にて、——執持は言ふ迄もなく執持名號の意味である。即ち我々の心に深く執り持つ可き處を書かれたものだらう。殊に上人が執持の文字を標された處より伺へば、『口傳鈔』『末燈抄』等の聖教ありて、それを何れも盛にお頂きになつたものであらうも、殊に上人が如信上人よりお傳へを受けられた處がありて、上人自身に深く執持してお出でになる處のものがありて、それをお書きになつたものだらう。

矢張り『斯うか、あーか』の六つかしきことになつて來るから、遙々京都迄出て來ねばならぬことになつて來たのであつた。故に然ういふ風に何處迄も何か變つたことがあるやうに思ふ。それが大きな誤りだと仰せられるのである。

『もししからば南都北嶺にもゆゝしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひと／＼にもあひたてまつりて、往生の要、よく／＼きかるべきなり』

それなら南都北嶺の學者達に行つて聞くがよい。『親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり。』もうこの御一言でよい。外に理屈つけると可かぬのである。親鸞に於きては、唯念佛して彌陀に助けられ参らす可しと、よき人法然上人の一言の御教化を蒙つて、それが心根に徹して有難かつた外に、何も無いのである。

四 池山氏及びその夫人の寶驗
今いふ『歎異鈔』の獨譯者、池山氏は私と共に西洋に

その二章が亦『歎異鈔』の二章と同じであつて、それを拜讀すると『歎異鈔』に言うてあつて、而も氣の附き難い處を、知らせて貰ふことが出来るのである。

三 『別の仔細なし』

先づ今の二章の文の初には、『各十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。』

如何にも關東より遙々十餘箇國の境を越え、身命を顧みずして聖人のお跡を慕ひて、京都に聞きに來られた當時の信者の狀が見える。又それ程命懸けで聞きに來られたの故、それが並み／＼の不審で無つたことが察せらるゝのである。然るに、

『しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにく／＼おぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。』

之が唯一應そういふ六つかしき理窟を言ふので無いと言はるゝのなら、それは關東の信者は常々承はつて知つて居つたのである。けれども然う聞いた上からも、

行き、今日喧かましき労働問題、社會問題を研究して我國に於て十七八年前に、早くにそれに手を着けやうとせられた方である。そうしてそれが却々困難にて、その爲に非常なる苦勞をせられた。極めて孝心深き方にて、その母御が昨年亡くなられた。何ういふことであつたか兩三年前に、『自分は何故斯うした淺間しき思ひが起るのであらう。』自分ながら變な思ひの起るのに驚いて、思はず南無阿彌陀佛々々々、口に念佛が出ると同時に今の『歎異鈔』——『親鸞に於きては唯念佛して云々』の一言が、雷の如く氣がついた。『あゝもう自分如き者は、この唯念佛のお慈悲の外に無い』と、爾來念佛を喜んで、即ちそれよりは仰せの如く、晝夜に唯念佛ばかりしてお出でになるのである。氏は久しき以前より岡山六高の教授を仕て居られるのであるが、即ちそれが教員室であらうと教室であらうと、唯南無阿彌陀佛々々と、即ちそれがお言葉通り『……仰せを蒙りて信する外に、別の仔細なきなり』である。

即ちこの御一言の味ひは之で頂くことが出来る。外に變つた味ひがあるのでは無い。併しこの池山氏は、よく／＼の事に思はれたことありて、そこを頂かれた

のであるから、之を軽いことに思うてはならぬ。

また氏の夫人は一昨年胃癌で亡くなられたのであるが、それが胃の具合が悪いとて病院へ診て貰ひに行き、醫師が診察して『どなたか、御宅の方に遇ひ度いが』と言つた。『しますと茲に在りますこの塊は』と聞くと『イヤその塊りのことに就いてだ』と言はれるのを聞くなり、忽ち絶望千尋の暗黒に墜落して、もう立ち居られぬ、身體がグラ／＼する。その時に思はす『あゝ茲ぢや、もう仕やうが無い、豫て茲を助けて下さらうとの廣大の仰せであつたか有難い——』（即ちこの暗黒を見て下さらうとの、思ひがけ無き大悲の仰せが『唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし』である。）——もうこの上はこの御慈悲に手を執られて如何やうにならうとも、一念茲に氣がつくなり先づ思はれたことは『若し之が他の者で有つたら仕方が無つたに、自分であつてマアよかつた。主人や他の者であつたら、何れ程困つたか知れまいに』と。——こは今日獨譯『歎異鈔』を言ひ出した御縁から申させて貰つたのである。即ち斯ういふ味ひが『唯念佛して……信する外に別の仔細なきなり』——爾るに一般

眞宗信者の言うて居る唯念佛の唯は、甚だ軽い。物の只貰ひの只になつてある。爾らず今癌で仕やうが無いといふ時に、その仕やうの無いのを哀はれみ、見捨てぬとの大慈悲の顯現が南無阿彌陀佛である。そのお心を頂くと、もうこのお慈悲ばかりであるのが、唯念佛の味ひなのである。

五 聖人の吉水入室

そこでこの事は之を細かく言うて行くと何程でも言ふことが出来るのであるが、殊に今日聖人の信仰を話させて貰ふとして、聖人が廿九歳、吉水の禪室に於て法然上人より『唯念佛』の御一言を蒙られたのが、實に今日他力眞宗のある根源である。之を思へば殊に茲は力を入れて申さなくてはならぬ。御承知の如く聖人の吉水入室は『御傳鈔』に、

建仁第一の曆春のころ（上人廿九歳）隱遁のころざしにひかれて、源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまいり給ひき。——

隱遁の志など言ふと眞宗は『山より出で、街へ』といふのに、をかしいと思はるゝかも知れぬも、それが眞宗で有らうが何であらうが、宗教は隱遁の志がもとであ

る。之が無くて佛教が開ける道理が無い。『世の中は彌々煩い、イヤになつた、當てにならぬ』と、そこで吉水の法然上人の禪坊に尋ね参り給うたとである。

是則、世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。

文飾が整ふてある故言葉に滑る恐れがあるも、要するに如何程心を運んでも到底自分の修養の道では及び難いから、その自分が何とかして救はれ度ひとである。そこは『式文』の言葉には

然れども色塵聲塵猿猴の情尚ほ忙かはしく、愛論見論翳膠の憶彌堅し。斷惑證理、愚鈍の身成し難く、速成覺位、未代の機草び匡し、仍つて出離を佛陀に誂へ、智識を神道に祈る。——

また『歎德文』には

然れども機教相應、凡慮明め難く、廻ち近くは根本中堂の本尊に對し、遠くは技未諸方の靈窟に詣で、解脫の徑路を祈り、眞實の知識を求む。特に歩を六角の精舎に運んで百日の懇念を底す處に云云。

即ち詮方盡きて聖人は、諸方の神社佛閣に祈りを籠め

られたのであつた。然るに

而、際、宿因多幸にして、本朝念佛の元祖黒谷聖人に謁し奉つて、出離の要道を問答す。（式文）

そこを今の『御傳鈔』のお言葉には眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきかめてこれをのべ給ふに——

即ち最後に六角堂の救世菩薩の導きで法然上人の所にお出でになると『眞宗紹隆の大祖聖人、殊に宗の淵源を盡くし、教の理致を極めて』は、教えの至極を盡くしてゐる。爾るに

たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし／＼けり。その教を蒙られた立所に……である。

そこで注意すべきは、斯く法然上人が教の至極を竭くして話されたのによりて、その立所にそのお意を頂かれ、それが聖人の絶對信となりて『歎異鈔』に出て來たのである。そこで言ひ度いのは眞宗の人は『斯う頂くのか、あゝ頂くのか』と、頂くに骨折るのであるけれども、頂くに骨折るので無い。それよりも先方が何を言はれるのであるか、言はるゝ處を聞かなくてはな

らぬ。『斯う頂くのか、あー頂くのか』は文字を書くのに『斯う書くのか、あー書くのか』に力入れるやうなもので、それは子供が『いろは』と教えられて『いろは』と言はねばならぬやうのことに取るからそれになる。今他力は何某と呼ばれ、ハイと答へずには居れぬと同じであつて、御眞實の深きを言はねば、自から頂かずに居れぬやうになつて来るのが他力である。然るに今日は一般に頂く方にのみ苦心して、仰しやつて下さる方を聞く方を過ちて居る。例へばこの二章にしても、青年の人は『如何にもよく聖人は徹底されたものである。地獄に墮ちたりとも更に後悔す可らず候』とは、如何にも著しき信である』と、信仰の結果に感服するはよけれども、而も聖人がそれ程の絶対信を持たれたは、法然上人から何を聞かれたからであるか、その聞かれた處を聞かなくては何もならぬ。唯『あーなつたら旨からう』のみで、肝腎の喰ふ可き馳走を忘れては何もならぬのである。

六 法然上人の選擇本願念佛の教

處でその法然上人の仰せられた唯念佛の味ひは、今の池山氏の経験で盡きてある。即ち我々は彌々となる

初めて言はれたかと思ふと然うで無い。それを斯く法然上人は『選擇集』に言うて下されたのであつて、それは然ういふやうに我々が何れの行も及ば無い。その及び難い法藏菩薩が發願の初に見て下されたばかりに其の者が見捨て難いといふ絶大の慈悲が現はれ、その大悲はその者の爲に有らゆる行法は悉く選り捨て、唯念佛の一法を選び取つて下されたのだといふのが、法然上人の選擇本願念佛との御教化である。處で此が頂く上には甚だ大切な處となつて来るのである。

七 法藏因位の本誓

處で言はなくてはならぬは、今日他方の教えが一般に届き難く、響きにくゝなつてある譯けは、言葉の上の解り難いといふこと、それもあらうが夫れよりも今日の我々の實際生活、日常生活に觸れ難くなつてあるといふこの點にある。若し私の話が少しでも取り所がありとすれば、それは私の話が今日の實際生活に少しでも中る處がある、そこ丈けだらうと思ふのである。そこで今斯く我々の座禪、戒行、それらの行法の我々に及び難い處を見て下されたといふても、それが今皆様の心に何程に響くであらうか。あゝ然うですか、位

と、もう仕やうが無いといふ處に突き當る。然るにその仕やうの無いのを豫て哀れ思召され、その仕やうの無いのが可哀相故、それを何處迄も見捨てぬとお慈悲であるとの御教化が、法然上人の言はれた選擇本願念佛といふことであり、それが唯念佛との仰せなのである。併し茲は軽いことになりてはならぬから――。

常に言ふ如く法然上人は『選擇集』をお説きになつた。その『選擇集』に説かれる思召は何うかといふに、『選擇集』に選り擇ぶといふは、若し持戒持律を以て往生の本願となさば、破戒無戒の者は往生が遂げられなくなる。爾るに持戒の者は甚だ少く、破戒の者は甚だ多い。又智慧高才を以て往生の本願と爲さば世の中に智慧ある者は甚だ少く、愚癡なる者は甚だ多い。といふやうに段々に我々が如何なる行法を以てしても、それでは到底及ばぬ者であるといふことを見て下されたから、其の者が如何なる者でも頂かれ稱えられる處の、唯念佛の一行を選擇攝取して下されたといふのが、法然上人の『選擇集』の御教化である。我々は『歎異鈔』に『何れの行も及びがたき身なれば云云』とあるから、如何なる行も及びがたといふことは、親鸞聖人が

にしか聞えぬは、初めからそんなこと仕やうと思つて居らぬからである。仕やうと思つてもそれが行へぬで困つて居られる人であつて、初めて響く。初めからする氣の無い者に、そんなこと何程言つたと何にもならぬ。況や初めから然ういふことをせぬのが眞宗と聞いて居らるゝ人達に、そんなこと百二百言うたとて、それは西洋に行く船が混雜して乗船出来ぬと言つたとて、行かうと思つて居る者には何でもないと同じである。

抑々覺如上人は『式文』に於て

爰に祖師聖人の化導に依つて、法藏因位の本誓を聴く。歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘す。祖師聖人の御出世によりて法藏因位の本誓を聞くことが出来たのが、今生の所詮だとお喜びになつた。又聖人御自身にも彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。(歎異鈔)まことに天地も碎けんばかりの告白である。その法藏

菩薩の五劫永劫の本願は、我々が戒行が出来ず、座禪が出来ず、その出来ぬを見て下されたばかりにその者の爲に唯念佛の一行を選択攝取して下された御親ごころである。即ちこの一事を承はることが出来たがそれ程の喜びだと、聖人や覺師がそれ程に言はれたは、即ちその一事に、我々の心に、それ程に喫驚仕なければならぬ或ことがあるからであるから、そこが聞かねばならぬ處である。

八 善し惡しを言うて居るのが最もいかぬ

處で斯ういふと際立つけれども、皆んなが平生皆な之を遣つて居るのである。即ち皆んなが平生『善いことを仕やう、人に不足無く、惡しく思はず、親切に』と、或は『自分は此れほど正しくして居るに、人があー斯う』と、斯ういふことが我々から離れぬは、何人もが『善く仕なければならぬ』『イヤ』それが出来る、出来ぬ』と、朝夕善惡の語を離れては、我々の生活が立た無くなつて居るからである。即ち座禪、戒行の専門語は用ゐて居ぬけれども、實際に於ては皆んなが『善くせねばならぬ、仕度い、出来て居る』と、この考を以て貫いて居るのである。そして何人もが皆んな自分は正しく出来て居る積りで居る。

自分では善い正しいと主張し合つて居るけれども、それに一つとして眞實のもの無く、その残らずが闇黒の所爲であるといふことを佛兼ねて見て下された。五劫の昔に於て見て下されたといふは茲のことである。

併し之も勞働問題とか社會問題とか、斯うした外界の事にしては感じにくい。他人のことは措き、世界の動搖動亂も、各自の心に『自分の方が善い』で、何處迄も人と争つて行く心を持つて居る。自分が間違つて居ぬと考えるから、それを人が理解し見て呉れぬと言ひては、互に善し惡し、何處迄も遣り合つて行く心を御同やうが持つて居るのである。すると然ういふやうに第一我々が何處迄も自分が善いと考える、それが人間争ひ心の根本である。すると然ういふやうに第一我々が善し惡しを言うて居るのが、それが一番惡いとなつて来る。

チト順序が碎けるけれど、先きいふ『執持鈔』二章には

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲にはたゞ信心をさきとす。其ほかをかへりみざるなり。

る。出来て居る積りで居るにそれが通らぬ、人が認めて呉れぬ。そこで人に不足が起り、無念な思ひが起り、モヤ／＼仕た思ひになつて居る。すると然うなつたのは初めに善く仕て居ると思ふて居つたのが、その善くが人に好く思はれ度い爲め、認められ度い爲めばかりに遣つて居つたに外ならなかつたからと、結局甚だ變なことになつて仕まふのである。即ち斯くして我々の實生活に、一つとして意味の有りやうは無いわけである。

ちと言ひ過ぎるけれども近年喧かましき勞働問題、社會問題、あれが日本でも西洋でも互に善し惡し遣り合つて居るばかり、あーやつて居てあれが結局何等か得る處があるか。互にあーして善し惡しいふてる丈けのことである。即ちそこが我々の何れの行も及び難いといふ點である。それもそこに氣がつくならよけれど、各自に自分の思ひで『やれる』で近年の大騒動、これが五濁惡世の現象に外なら無い。今日勞働、社會運動の火の手の激しきは、即ち五濁惡世の現象に外ならぬと思ふのである。

即ち法藏菩薩は五劫の昔に於て、兼て人間が必ず茲に出て來るといふことを見て下された。人間が各自に覺如上人はこれから書き出してお出でになる。今頃ソロ／＼戒禪が出来ませぬの話なら、斯のやうなことを言はれ無くともよい譯けである。我々何程眞面目にやつて居つても、それが人に見て貰へ無いで終つた時、そこに一點不足が出て來るなら、それは名利に人師を好んで居つたに外ならぬ。すると然ういふやうに何時迄も善し惡しの止まぬ、仕やうの無い、地獄必定の闇黒の様であることを見て下されて、其の仕方無き者を如何にせんかとの五劫永劫の本願であるといふ、茲から聞かして貰はねば分らぬわけになつて来る。

九 佛念主義の發生

猶ほ前後するけれども茲で言うて仕まふと、『歎異鈔』二章の、先きの次のお言葉に、

『念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。』

之は法然上人の他のお弟子方を持つて來て話すがよい。他の弟子方は念佛は法然上人が稱えよと仰せられるのだから『之を稱えるのが善い、稱えるから助るのだ』と、即ち斯れに思つて居られた人達が、淨土に生

種と稱えて居られた人達である。處が之が極めて誠む可き事柄で、設えは『信心上のことぢや、説教参りは善い事仕た』と、苟も仕たとなつたらそれは自分の善いことになつて仕まふ。と同やうに念佛するを善いことするに思つて稱えて居られたが、三百八十餘人の人達である。處が法然上人はそんな念佛は説いて居られぬ。『何れの行も及ばぬ』是非知らず、邪正も分からぬ。その仕方の無い者に、其の仕方の無いことを憐みて、其の者が助るやう、稱えられるやう、親よりお與への南無阿彌陀佛である。故に稱えるは稱えるが善いことをするので無い。『それ迄が及ばぬ者』とある親の親心の塊りが南無阿彌陀佛ぞ』と、之が法然上人の御教化であつたのである。處が之を『有難う』と頂くと、『だから稱えねばならぬ』となつて行つたのと、茲で間違つて念佛するは善いことぢや〜と、次第に善いことに目を着けるやうになつて行つたのであつた。

大分越後方面では念佛主義が言はれて來た。之が信仰問題が進んだのなら結構であるも、反對に之までは徹底なんぞと思つて居つたけれども、何年そんなこと言つて居つても何うにもならぬから、唯念佛するばかりであると、甚しきは木魚叩いて念佛するとなつて行つたのであるから何ういふものか。此間も越後から或人訪ねて見えて、或人の説教聞いたら、皆んなが『歎異鈔々々々』と言つて居るけども、一體皆んなが何ういふ風に『歎異鈔』を讀んで居るか、中に『邊地の往生をとぐるひと、つゝには地獄におつべし云云』の御教化、あれは念佛すれば少くも邊地化土には往けるといふことである。化土にさへ往けば間違ひないから、化土でもよいから念佛稱へよと言つた方があつたが、何ういふものかといふ御不審があつた。念佛主義を強いて言はうとするから、斯んなことまで言はねばならぬことになつて來る。

無間

地獄に墮在すべきものなり。

とあるから、設え何程念佛しやうが、信心が無つたら無間地獄に墮ちる』と、この兩者の争ひが聖人の御時代にもあつたのであつた。一方に『念佛するのだ〜』と、何處迄も念佛の善の方に執着して往かうとするのがあつたから、他方には『それは大きな間違ひである。惡人をお見捨てなき本願故、惡業の者をこそ助け給ふ可きである。そのやうに念佛して殊勝振つて居る者は、そのやうな者は邊地化土にも往生して、終には地獄に墮ちる』と、終には念佛を地獄の業とまで言ふやうになつたのがあつたのであつた。即ちこれを仰つしやつて今の『歎異鈔』のお言葉があつたのである。

處で之が法門沙汰のやうであるけれども、矢張り之が我々の善し惡しの問題である。斯くの如く我々の生活は、法門の沙汰に至る迄が『善い惡い』『地獄へ墮ちる、墮ちぬ』と、何處迄も自分の方が善いと思ひ、人のことを惡しと見て遣つて居る。而も然ういふ風に自分のことを善いと考え、人のことを惡しと見る、それが人生争ひの根源であると知る時は、然ういふ風にいつ迄も我々が善し惡しを言つて居る、その事が最も惡いと

いふことに決着して來る。惡いとなれば止めるばかりであるが、それが止められるか、止められぬ。するとその止められぬのが亦た善い惡いとなつて行つて、我々の善惡なるものは何を言つて居るのか全く意味を爲さぬ。即ちそのことを仰せられたのが今の『念佛はまことに淨土にうまるゝ……總じてもて存知せざるなり』とか。『是非知らず、邪正もわかぬ』とか。またよしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり。

とか。また『歎異鈔』の結文には聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆへは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、——煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておはしますところおほせはさふらひしか。とか、之が皆な茲の味ひを仰しやつて下されたお言葉なのである。

一〇 同情の内容

すると二章のその次の言葉には

『たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行をばけみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして、地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびかたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

斯く我々頻に善し惡しを言うるのであるけれども、その善し惡しに一つとして取り處なき、何れの行も及ばぬ、地獄は一定住みかの者とが我々の結局の所となる。然るにその我々であることを、我々は物に行き當つて初めて驚くのであるに、佛に於ては五劫の昔に既にその我々であることを見て下されたといふ、茲を確り申上げなくてはならぬ。

私は自分の經驗に於ては、今迄自分の善いと思うて居つた思ひが、殘らず自分の淺間しきものであつたことに氣づいて苦しんだ時には、もう外に仕やうは無つた。唯自分の心の有りの儘を打出して、人にそれを見

て貰ひ度いばかりであつた。何故ならば今まで自分が眞面目して居て、人に善く思はれ、買ひ取られて居ては困る。心の底をさらけ出して言うて仕まひ度いばかりであつた。處がそれを出すところな心で居たかと、人に呆れられて仕まふばかりで、それを一人の見て呉れ手が無い。故に『之ばかりは親にも言へぬ、兄弟にも言へぬ』と、何處迄も自分一人で孤獨の淋しさを續けるより仕やうが無つた。處が五劫の昔に於て我々の茲を見て下されたといふ話なのである。併し唯見て下された丈けでは仕やうが無い。そこに大切なことがある。

私はこのお慈悲のことを常に同情と申して居る。同情の語は『信仰之餘瀝』を書いた時に初めて用ゐたのであつたが、今日では甚だ輕いことに言ふやうになり、甚しきは反對の淺間しき意味にまで言ふやうになつてある。その證據には何程同情と申しても『唯同情丈けでは困る』といふやうに、唯言葉丈けのことになり、内容が無いことになつてある。

抑々同情とは如何といふに、私が善ければ人も私を善いと言ひ、惡しければ人も私をいかぬと言ふが通則

である。故に今私が善く出来無いの故、出来ぬ者はいかぬと斥けられるが當り前であるに『イヤ我は汝のその出来無いところを哀はれと見たのであるからは、それを可かぬと斥けるで無しに、そこをこそ彌々氣の毒と思ふでこそあれ、それを一點惡しく思ふものか』と、

茲で同情なる語が意義が出て來るのである。茲が専門語でいへば、無上殊勝の願なる言葉が出て來る處である。當り前ならば『善き者ならば善い、惡しき者ならば可かぬ』之が世間の原則である。新聞に惡口書かれるのは何故イヤか。惡い者ならば可かぬと人が皆な言ふと思はれるからである。爾るに之が原則の世に在りて、我々が如何しても自分の惡しさが止められ無い。故に當り前ならば其者なら可かぬと茲で捨てられる處を、その捨てられるが氣の毒と見たとある慈悲の上からは、そこを茲でぶち破りて『否、その者なればこそ誠に氣の毒に思ふ、見捨て難く思ふ。その者なればこそその汝を彌々捨てゝは置けぬで無いか』と茲で手の平反して彌々反對に、益々造る瀬無く立ち向つて來て下さる。茲で同情なる語が意義を爲し來るのである。茲が信仰問題でガリとひと廻はりする肝腎の處、この轉廻の

處が茲で、ある、茲で多くの人が生活とお慈悲とが別々になるもの故、之れ言ふと『だから惡してもよいのだ』と、直ぐに之に言はうとされるのである。けれども『惡しくてもよい』で安心のされやうは無い。人に惡しく思はれて殘念がる人間が、惡しくてもよいで安心のされやうは無い。惡しければ彌々可かぬと呆れられて仕まふ丈けである。惡しくては可かぬから皆んなが止めやう／＼に苦心する。けれども何程苦心してもそれが止められぬから起つて來た今の問題である。そこは初めから爲る氣の無い人、『それは凡夫ぢやもの、出來ぬが當り前』で平氣で居る人にあつては、彌陀の本願は初めから意味を爲さぬ。併し實際に於ては『こんなでは可かぬ／＼』で悲しんで居る人が多いのである。

そこは私如きも苦んだは唯一つ。何程苦心しても何うしても人に隔てが止まらなかつた。その爲め人生全部が暗かりになつて仕まつたのであつた。私とて『此方から隔てさへせねば、人も快く自分に向つて呉れ

る『それは分つて居たから、何とかして止めやう』に苦心した。けれどもそれが止められ無に行き詰つて仕まつたのであつた。其處へ人ありて『イヤ、君がそれ程苦心せられてもそれが止まらぬは、それが君の性なからである。身體が不自由で電車で倒れて動けぬ者が動かうとしても、それは動けぬが當然である。我は君の動かうにも動かれぬ處を氣の毒と見たからは、動かれねば、動かれぬ丈け猶は氣の毒で捨て、置けぬ。よし、引受けた、心配すな、何程重たからうが危険であらうが、必ず捨てゝは置かぬから』と、この同情で見て下されたといふが、先きの、佛の本願に於て、我々の戒行修行が出来ぬを見て下されたとある處である。

一 永劫修行の眞意義如何

猶ほ言ひ度いのはこの見て下さる迄は分るかも知れぬが、それ丈けでは信仰にならぬといふことである。今の『惡しくてもよい』の方は、猶ほ出来るのを仕無いで居る心持ち故、この方は全然聞かれて居らぬ。處が我々如何にしても出来ぬ、その出来ぬを見て下さると聞くと、之は難有いになり易いのである。けれどもそれ丈けではその内容は唯出来ぬ丈けであつて、眞の満足に

はなつて居らぬのである。よく皆様が『有難いには有難いが、併し何うも唯それ丈けでは困る』と、之が出て来るは茲である。そこは動けぬ者の動けぬところを見たからは、歩けとある諸佛に代はりて、その歩けず、動けぬのを惡しく思はず『何處々々迄もその一身は自分が引受けるぞ』と、茲が大切な處となつて来る。猶ほ緻密に言へば私は隔てが止まぬの故、何處々々迄も私の方は隔てゝ行くのである。けれども先方は其の止まぬを哀はれと見たとのお慈悲故、止まらねば止まぬ程彌々哀はれと、その隔てる私を惡しく思はず、隔てる私に何處迄も隔て無くして下さる御眞實でましますのである。故に唯止まぬ丈けでは仕やうが無い。此方はその止まぬ性分で何處迄も我慢張り、隔てゝかゝるのである。それを先方はその止まらぬ處が彌々哀はれとそこは例の『涅槃經』のお言葉――

如來一切の爲に常に慈父母と作りたまふ。當に知るべし、諸の衆生は皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に着せられて狂亂所爲多きが如し。

我々此方は狂人故、狂人は誰彼無しに突掛つて行くの

である。それを『ウンあれは狂ひですることである。狂ひですること』見た上は、あれを咎めることはならぬ、可哀相な者である。可哀相と見た上は如何に突掛らうが、組み付いて來やうが、汝に狂ひがある限り、我は何處迄も争はず、逆らはず、我慢ばらず、何處々々迄も惡しくは仕向け無いぞ』とある。茲の御眞實でましますことを確り聞いて措かぬと、最も肝腎の處をば取り落す。

故に嘗つても或人が『先生のやうにお察し下さるともつと悪い處を出してやれ、といふやうな氣になります。』私申ししたには『ウン、よからう、何れ丈けなりと出して御覽。』若し之が實業家なら何れ丈け儲けても利益の根性が止まぬといふことになるのである。處がそこを見て呉れた人ありて『ウン、よからう、何れ丈けなりと上げやう。汝にその根性が止まぬ限り、我が家も遣らう。財産も遣らう。』何れ程でも呉れるとなると、初めて其者が利益を取る必要が無くなつて來るのである。故に茲迄御眞實を聞かねばいかぬ。それを皆んなが、『自分が悪い心が止まぬ。この止まぬのを見て下さるが佛である。』イヤ『我々は時として人を千人殺すこと

がある。殺しても仕方が無いと言つて下さるのぢや』と、茲を輕いことに聞いて居るから可かぬ。寧ろそれ程に人を仆し、犠牲にして生きて行く性分の我々である。爾るにその性分の止まぬを哀はれと見て下された上からは、其の性分の私に『サア、その汝の爲めにはこの身も遣らう。財産も遣らう。何程慾深く我に向ふも、それを惡しくは思はぬぞ。何程慾深く我に向ふも、我よりは汝の爲には何處迄も欲を離れるぞ。即ち飽く迄争ひ深き私の根性に、その根性で争うて見やうが無くなるまでその根性に大安慰を與へる爲め何處迄も貧狼飽く無き私の心に、その心で食いやうが無くなるまで、その心に満足と與へる爲め遣る瀬無き眞實を以て向うて下されたが永劫の御苦勞である。處でこのことが實人生の上に非常なる響きを持つて來る處になる。

一二 満足の源泉とそれより來る

信仰的態度

それは今實際生活に於て、我々が他より非常なる五分々々の心を以て向はれたと假定する。先方が五分々々だからとて此方も五分々々で遣るのなら、それなら

信仰の態度とはならぬのである。敢て私は相手の五分々々に對し、此方は五分々々を絶對に離れてとまでは言はぬ。併しこの五分々々の争ひの人生に、如何にしても私が五分々々の根性が止まら無い。それ見て下され、その私の爲め今の何處々々迄も五分々々離れたお心で向つて下さる御眞實であることを頂けば、敢て佛の態度を學ぶでは無けれども、その御眞實の爲に如何にも満足されて、五分々々離れて行ける處が出て來ねば、信仰の態度とはなつて來ぬのである。それで無ければ信仰が人生に意義が無い。或は然ういふ立派な心が我々に出て來るは、をかしいと思はるゝ方があるかも知れぬ。併し我々此方が五分々々の心が止まぬから、その止まぬが見捨て難いと其の爲に、その者が腹ふくるゝまで、如何程でも佛の方より争はず、逆はず仕て下さる御眞實である。それに一點氣がつけば、如何な五分々々の奴も、それ程迄にこの五分々々をお見捨て無い思召であつたか、恐入りましたと、初めてその御眞實に充されて、我々の五分々々根性の根を切られて仕まふ處が有難い處である。茲が佛の無我の慈悲の爲に、我々の有我が折れて仕まふ處である。そこを『和

讀』には

五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみたり。抑々我々がそれ程人と争ひ、突つかうり、狂ひ廻らねばならなかつたは何故であるか。内面に何うしても埋めて見やう無き缺陷があり、物足らぬ所があつたからである。處がその爲に飽く迄も人に喰ひ付き、吠えつく煩惱の狂犬の私の爲に、何處迄もそれに満さしめる可く『それに惡しくは思はぬぞ。隔てぬぞ。』何處迄でも綱を延ばして下さる御眞實に遇へば、如何な煩惱の私もこの御眞實の前には『不斷煩惱得涅槃』と、その御眞實には満たしめられ、恐入つたのが私の経験であつた。處が茲我々の隔ての止まぬを見て下さるまでは分り易いも、その止まぬ我々の愚癡、無智、争ひ、五分々々。それを無理ないと知召し、それに何處迄も涙を以て向うて下さる御眞實である爲に、終に如何な狂犬の私も、その慈悲の前には腹底から満足して、尾を振り手をついて畏れ入る——私が然うなる迄何處迄も眞實に仕續けて下さるが永劫の修行であるといふ、茲を頂くことが難いのである。

處が之が輕いとして無い聖人『信卷』の仰せには宜はく一切の群生海無始より已來乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なく、虛假誑僞にして眞實の心なし。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も清淨ならざることをなく、眞實ならざることなし。云云。

『是を以て』とは、私が手も足も立たぬ處を見て下されたからである。見て下されたから手足も動かぬ者の動かぬ處が不便と其者に三業の修し給ふ所、一念一刹那もこの御眞實を以て向うて下されたが永劫の修行であるとの言葉である。處がこれが結果に表はれては著しき如きも、成る程我々五分々々の性分は止まぬかなれども、その止まぬを佛より斯く飽く迄も遣る瀬なく見て下さる御眞實である爲めに、寧ろ人生の五分々々を離れて手放しが出来る處が信仰の偉大なる處である。然う言ふと獵、漁、商ひ、奉公の凡夫が、それが離れられるはをかしいとあるかも知れぬも、その奴がそう出て來るは出て來られる丈の譯けがある。それは『人生如何にならうとその仕方のない汝を何處迄も

引受ける』と、私の仕やうの無い處を十二分に了解して下され、その奴が五分々々の心の根の切れるまで何處迄も疎かに思うて下さらぬ御眞實を頂くとなると、もう五分々々に出やうにも出て見やうがなくなりて、其の奴が満足させられるのである。

故によく私は斯うも申上げる。人生に苦んで聞きにお出でになる方に對して『それは成る程その苦、其の愚癡が出る筈である。それは無理ない、最も』と。處が自分はこんな心故、呆れたと言はれやうと思つてお出になつたのが、それ程迄に言はるゝ故有難いと受けて下さるのである。併し私の側面から言ふの故、之は甚だ言ひ易い。私に對して五分々々を持つて居られるのではないのだから。併しその人の心にする時は、斯んな心では誰にでも斥けられやうと思つてお出になつた處に、意外にもそれが聞いて貰へるといふのだから有難い。そうさへ聞いて呉れ手がある時は、相當苦しい處にも辛棒出來るといふ風になり得るのである。併し之が若し私に對して惡しく思ふとあるのなら、私は然うは言はぬかも知れぬ。處が我々の狂ひ性は誰彼の區別は無い。それは我々の性分本質で、それは誰にで

も出るの故その性分に頭が下らなければ可かぬ。近頃は改造々々の言葉が流行する。若し人心の改造と云ふことが言ひ得べくんばこれぞ眞に心の改造である。單に甲の人乙の者に丈で無く、環境残らず五分々々で聞はねば立てぬ人生に、我々がその五分々々性の塊りであるところを悲憫して、寧ろ『その性分であるところを何處々々までも見やう。』この慈悲でまします爲め、終に如何な私の三毒五欲もその慈悲には飽き足つて仕まうて、

本願力にあひぬれば、一むなくすぐる人ぞなき、功德の寶海みち／＼と、煩惱の濁水へだてなし。慈悲極り無き故に如何な煩惱の濁水も和らげられ、緩和せられて仕まふのである。

一三 佛の無貪、無瞋、無癡

猶ほ言ひ過ぎるけれどもこの五劫永劫の御苦勞なることは、茲が分ると實に有難い處である。五劫永劫は私が其の我慢の止まぬ性質なることを見て下されて、『止まぬ者に止めよと言ふは無理である。』と、その止まぬ者に佛よりは飽く迄我慢を離れて我慢張らず、此方は何處迄も愚癡、怒り、不足で向うて行くのを、そ

の然うなる處が眞に同情す可き故、その者には其の奴が終に腹ふくれて『満足しました』となるまで、何うかして温め、和め、慰め、融かしてやらなければならぬと、茲を見て下されたが五劫の思惟といふことなのである。そしてその結果が、その通りに仕て下された永劫の終行で萬德圓備の南無阿彌陀佛が出来、阿彌陀佛と現はれ、そしてその廣大のお姿を以て、我々苦惱の人生に顯現して下されたと、斯ういふことなのである。斯う聞くと之は實に大きなことである。

それは成る程親鸞聖人や法然上人は、人生問題といふ言葉は用ゐられなかつたかも知れぬも、我々が戒行修善の出来ぬを見て下されたといふは、即ち我々の本質がそういふ性分で、逆も然ういふことが出来る者で無いことを見て下されたといふことである。見て下されたからその出来ぬが捨てられぬと、その者に永劫の修行して

欲覺、瞋覺、害覺を生せず、慾想、瞋想、害想を起さす云々。(大經)

處が茲が今迄の言ひ方は甚だ簡單で『佛は我々の出来ぬことを仕て下された』我々になり代はりて仕て下さ

れた』と、恰も此方は遊んで居るけれども先方は働いて下さると言はんばかりの言ひ方で、之では我々の心に響きを持たぬ。寧ろ此方が腹立ちの止まぬ奴故、その止まぬが哀はれとその奴に何處迄も怒らざる心で向うて下さるが、佛の無瞋の眞實である。私が欲の思ひが止まぬ奴故、その奴には最後迄呆れ無いで、欲を離れた思ひで見えてやるより仕やうが無いと、之が佛の無貪の眞實といふことである。即ち然うさすは、さす丈け此方が何處迄も遣る奴だからである。親が子の爲め苦勞して金呉れるは、親は物好きに苦勞して呉れるといふことは無い。使ふ子供が仕やうが無い故、其の後始末をして下さるのである。使へば使ふ丈けその仕やうの無いのが捨て、置けぬから、何れ丈けでも遣らすには居れぬのが親の慈悲心である。『なり代はりて』位の輕い話ではない。

然ういふと『それ程迄にさせて相濟まぬ』と言はるゝかも知れぬも、相濟まぬでは何もならぬ。それまでにさるゝ深き慈愛には、如何な子供も頭が下りて満足さるゝ處がある、そこが一番肝腎なのである。

此の間も或る高等學校の學生が罪が深い／＼と悲し

んで居た。その深いを捨てぬ慈悲とはたで一友が話したら『斯んな深い上に猶ほその上恵まれたりしては、猶ほ深くなりて困る』と言つたといふ話があつた。借金で困つて居る處に『猶ほ何れ丈けなりと貸してやらう』貸さるれば貸さるゝ丈け多くなりて困る道理である。茲が私の仕やうが無いのが救はれて行くと、自分で何處迄も責任持ちて善くして行くと、自分のお慈悲は『汝の返へせ無いのが氣の毒故、それを何れ丈けでも此方が返して遣らう』故に悪しければ悪しき程捨てられ無いのである。茲を『私が親に苦勞かけて相濟まぬ』といふたとて、濟まぬのならば何うされるか。然う言つた切りのことである。濟まぬは今更のことと無い。寧ろその濟まぬを、惡しく思はぬと、その冷き私に何處迄も寛に温かくされる眞實故——その代はり佛の御苦勞は一通りのことで無い。恰も冷え切つた子供の手を親が抱きかゝえて温める如く、此方が煩惱起せば『起すのがあな哀はれ』五逆十惡なれば『然うあるのが彌々不便』と、其の哀はれ／＼の深き思召には、

本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、

煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとしむ。

煩惱の闇黒、苦惱の有る限りそれを何處までもとの大悲の深きを聞けば、その煩惱逆惡の奴が此の世の中からその不可思議の恵みに満されて『煩惱菩提體無二』である。又『正信偈』文には

惑染の凡夫信心を發しぬれば、生死即ち涅槃なりと證知せしむ。

如何な煩惱惑染の奴も、この何處々々迄もとの御眞實の爲には、終に信の一念に此世の中ながら廣大の恵みに遇ひ奉り、眞實のお慈悲の中に往生し、遂に永劫の證に入らさせて貰ふことが出来ると、斯ういふことが法然上人の選擇本願の御精神であつたのである。

一四 相對善、絕對善

以上はよく言ひ過ぎた嫌ひがあるも、そこで私は『歎異鈔』二章を讀むに、こんな風に一寸言葉を作つて見た。それは念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり』は相對の善惡である。然ういふ風に善し惡し言つて居るのは、皆なそらごとたはごとであつて、皆ないかぬ。故にそれが『いづれ

斯の行は即ち諸の善法を攝し、諸の徳本を具せり。極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。

併し之は此方からする相對善では無くして、先方より仕て下さる絕對善であることは、呉々も氣をつけて置なくてはならぬ。

之は『歎異鈔』一章から言うても

しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に。

あとの善が絕對善である。この善が無くば他の如何なる善も要の無い譯けがわからぬ。我々が日輪の大善が出て夜が明ければ、ランプ、電燈の善し惡しは最早や問題にならぬのである。併しこのお照らしが見え無い限り線香の光りも使はずに居れぬのだから。兎角眞宗の人が維修の手放しが出来ぬのは、斯の如何なるにも呆れ給はぬ佛の絕對の大善であることに、腹のふくれやうが足り無いからである。

一五 弘願眞宗

話が大部分、んがらかつて来るも、先きの『執持鈔』の第三章の中には、善導大師の弘願眞宗の出所になる文が引かれてある。それは大師の『玄義分』の初に、

の行も及びがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし』の絕對惡である。故に之を

極濟無邊極濁惡(正信偈)

とのお慈悲であると、茲迄はこれ迄も言ひて居つたのであつた。

處が此頃氣づき出したは、此極濁惡を如何に惡しからんが何處迄もそれを捨てずにあるお眞實となると、之迄は之を御眞實とは言つて居つたのであつた。それは『よろずのこと、みなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、唯念佛のみぞまことにておはします』のお眞實は、飽く迄もこの絕對惡を見捨てぬお眞實と、申して居つたのであつた。それを今度は思ひ切つて善といふ言葉を使つて見た。我々の絕對惡を何處迄も捨てぬお眞實が、絕對善と申して見度いのである。全體聖人は善の語は余り用ゐなさらぬ。何故ならば我々の善し惡しの相對善に紛れ易いから。併し『末燈抄』末には寶號經の言葉を引かれて

名號はこれ善なり、行なり。行といふは善をするに

即ち佛の名號は絕對の善である。亦『行卷』には

弘願と言ふは大經の説の如し。一切善惡の凡夫生を得る者は、皆な阿彌陀佛の大願業力に乗じて、増上縁と爲さざるは莫し。

一切善惡の凡夫が救はるゝは、善凡夫がその善の力で救はるゝでも無く、惡凡夫が惡の爲めに捨てらるゝでも無く、善も惡も皆な阿彌陀佛の大願業力に乗じて助けられるのだといふお言葉である。親鸞聖人が在家止住の姿で、家庭生活の儘でお喜びになつた處に、この文は活きてある。それは我々が多少の善が出来たからとて其の善が要を爲すのでもなく、又惡人が自分が惡だからとて、その惡が何うか出来るといふのでも無く、寧ろ然ういふ善惡を言つて居るのが我々凡夫の絕對惡であるところを悲憫して、その惡を何處迄も見捨てぬとある、佛のお慈悲の大善一つで助けられるのである。之が念佛成佛は眞宗であるといふのが聖人の恩召であつて、故に聖人は頻に弘願眞宗々々々といふことを仰しやつてある。『和讃』には

經道滅盡ときいたり、如來出世の本意なる、

弘願眞宗にあひぬれば、凡夫念じてさとりなり。序に『執持鈔』の今の御文のある所を拜讀して見る

と、

又のたまはく

光明寺の和尚善導の御ことの大無量壽經の、第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに、善惡凡夫得生おぼ莫不皆乘阿彌陀佛、大願業力爲増上縁といへり。

このころは、善人なればとて、をのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝことかなふべからずとなり。惡人また申すにやおよぶ。己が惡業のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゞず惡業もまたさまたげとならず。善人の往生するも彌陀如來の別願、超世の大慈大悲にあらずはかなひがたし。――

善人が助るもその役に立たぬをお見捨ての無いこの大慈大悲のお力によるより仕やうは無い。

――惡人の往生、またかけてもおもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇持をあらはさんがためなれば、五劫があひだこれを思惟し永劫があひだこれを行じて、かゝるあさましきものが、六趣四生よりかはすみかもなく、うかむべき

故に聖人のこの思召が『教行信證』にあつては劈頭總序の文に來て

竊におもひか以れば難思の弘誓は難度海を度するの大船、云々。

この弘の字となつて出て來たのである。然れば我々の斯の淺間しきを飽くまでも惡しく思召さず、何處迄も斯の者に呆れ給はざる窮り無き大悲の御眞實一つが絶對善であつて、そうして之を面の當り與へて下されたが聖人にあつては『唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし』との『よき人の仰せ』と。斯ういふことになるのである。

一六 眞之善知識

處で、此の頃も斯の『善き人の仰せ』に就き聖人の『愚禿鈔』を頂いて見るに、善導大師の二河白道の文を解釋せられて

無人空過の澤と言ふは、

惡友なり、眞善知識に値はざるなり。眞の言は假に對し偽に對す。善知識とは惡知識に對する也。

眞の善知識、正の善知識、實の善知識、是の善知識、

期なきがために、とりはきむねとおこされたれば、惡業に卑下すべからずとすゝめたまふむねなり。さればをのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するまことなくんば、をのれがもつところの惡業なんぞ淨土の生因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかされ、三途八難にこそしづむべけれ、なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生のためにはその要なし。惡もまたさきの如し。しかればたゞ機生得の善惡なり。かの土のぞみ、他力に歸せずはおもひたへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり。増上縁とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり。(已上)

我々が『善いからよい、惡いからい、かぬ』イヤ『念佛は極樂行きの種である、地獄に墮ちる業である』などゝ、そんなことで我々が救はるゝので無い。何れの行も及ばぬ地獄は一定の、その仕方なき凡夫を何處迄も捨てぬの大慈大悲の大願業力一つに引かれて救はるゝのであつて、之が如來出世の本意、弘願眞宗であると

善の善知識、善性の人なり。

惡知識とは、假の善知識、

偽の善知識、邪の善知識、

虛の善知識、非の善知識、

惡の善知識、惡性の人なり。

特に眞の善知識の文字を用ゐて、それは正の善知識、

實の善知識、とやうに書き、そしてその反對が惡の善

知識、邪の善知識とやうに書き分けてお出でになる。

之は『和讃』に

眞の知識にあふことは、かたきがなかなをなたし、

流轉輪廻のきはなきは、疑情のさほりにしくぞなき。

眞の知識に値ふとあるが之れである。それは『歎異鈔』

二章に『唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、

よき人の仰せを蒙りて』とある、その善き人(法然上人)に値ひ奉つたことを仰しやつてあるのである。

抑々我々が我々の惡しきを何處迄もお見捨ての無い

眞の知識に値ひ参らせたまひは何處にあるかといふ

、に初にいふこの『歎異鈔』二章のお言葉を『執持鈔』の

二章の文に較べて頂くに、『執持鈔』文に

故聖人の黒谷源空聖人のおほせに、源空があらんと

へゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはり
しうへは、たとへ地獄なりとも故聖人のわたらせ
まふところへまいるべしとおもふなり。
『設え地獄でも故聖人のお出でになる處へ行かうと思
ふ』とは、實に著しき一言である。こは後の處にも今
一箇所――

しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆ
かばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さ
ればたと地獄なりといふとも、故聖人のわたらせ
まふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡
の生所わたくしのさだむるところにあらずといふな
りと。これ自力をすて、他力に歸するすがたなり。
同じく『地獄でも法然上人のお出でになる所へ参らん
と思ひ固めて居る』とは、如何にも思ひ切つた御一言
である。これは『歎異抄』の方では『たとえ法然上人に
すかされ参らせて地獄へ行くと、もとより地獄は一
定すみかの身の上故後悔せぬ』と書いてある丈けであ
るも『執持鈔』の方では斯く『源空聖人が連れて行つ
て下さる處へ何處までも附いて行く、設え地獄まで
も法然上人のお供する』と、地獄が法然上人に附いて

んだ時には『誰か私の隔ての止まぬを見て呉るゝ友は
無からうか。そういふ友は如何に私があらうが、その
私と艱難、危難を共にし、最後迄一つ船に乗りて、總
てを同じく仕て呉れる友』といふ考が附いて仕まつて
居た。また眞に私が仕方が無いのが氣の毒と同情して
呉るゝ友ならば、それは何處迄も私と艱難危難を共に
仕て呉れ可き筈である。今法然上人は四十三歳の御時
黒谷の報恩藏にて、善導大師の『一心専念彌陀名號』の
文を披き、戒行修行、種々なる道はあるも、吾が如き
如何なる行も及ばぬ者は、その及ばぬを捨てぬとの大
慈大悲の念佛ばかりと、それより専ら念佛一つを喜
んでお出になつた處の法然上人の唯念佛の御教化であ
る。故に今その本願念佛の船を差向けて『サア源空が
あらんところへゆかんとおもはるべし』――此方の
仕やうの無いのを御覽下されて『その仕やうの無いの
と何處迄も危難を共に仕やう』斯の御眞實に遇ひ奉つ
たのであるから、『……たとしかにうけたまはりし
うへは、たとへ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふ
ところへまいるべしとおもふなり』『設え地獄へなりと
も何處へなりとも、面の當りこの廣大なお眞實に遇ひ

仕まつてある丈けが多くなりてある。その然うなつて
来る源は法然上人の仰せに、もうそのお意が附いて仕
まつて居るからである。

一七 法然上人の仰せが即ち佛の御眞實

それは聖人が彌々お頂きになつた有様は、聖人が、
『最早や何れの行も及ばぬ、地獄は一定すみか』と、
行き詰つてお出でになつた處へ、今法然上人の南無阿
彌陀佛の御教化は、今洪水汎濫して仕やうが無いとい
ふ處へ、南無阿彌陀佛の一艘の船を差向け、

無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、
生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ。

『自からこの船に乗り汝を渡さうといふ上は、設え轉
覆らうと沈まうと、船若し覆える時は我も一緒に汝と
運命を共に仕やうといふのである』――又今病氣で死
なねばならぬといふ處へ『この一服の藥をやらう。こ
の藥は我が既に毒味して居るのである上は、この一服
は我が何處迄も汝と生死を共に仕やうといふのである
ぞ』と、斯く法然上人の仰しつて下された處は、何處
迄も自分と危難を共にし、境遇を同じく仕て下さる御
眞實であつた處が有難いのである。これは私など苦し

奉つては、このお眞實に従つて、南無阿彌陀佛々々々
と何處までもお供するばかり』と、これが出て來ず
はあらぬのである。

こは寧ろ文の方で頂いた方がよい。『執持鈔』の二章
今のお言葉の續きには、

このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら
凡夫かならず地獄におつべし。――

この船、この船頭に遇ひ奉らずば、我等凡夫、今顛覆
らんならぬ處であつたのである。

――しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌
陀の本願をきき、攝取不捨のことはりをむねにおさ
め、生死のはなれかたきをはなれ、淨土のむまれが
たきを一定と期すること、さらにわたくしのちから
にあらず。

その仕やうの無い處へ『この船に乗れ！』態々差向けて
下された御眞實の船に遇ひ奉つたのであるから、これ
更に私の力で無い。

――たとひ彌陀の佛智に歸して、念佛するが地獄
の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人さ
づけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつ

といふとも、さらにくやしむおもひあるべからず。

設えそれが泥船、土船であらうとも、その船に乗らば死ぬる私に差向けて下された御眞實の船である。よし沈まうと顛覆らうと、既にあなた御自身が、身を以て乗つて見せて下されたる處の船である。その船であれば今眼前その不思議の御眞實に遇ひ参らせれたが有難いばかりで、設え法然上人にすかされ参らせて地獄へおちたりとも更に後悔せぬ。

——そのゆへは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかは、ひとりゆくべからず。師とともにおつべし。云々。

即ち眞の善知識は、斯ういふ知識に遇ひ参らせれたのだからである。唯口先きで仰しやつてある文字で無い。御自身に何處迄も同じ船に乗り、同じ藥を服し、飽く迄も境遇を同じくして——言ひ換へれば

汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。の、本願招喚の眞實を、あなた御自身に體現して、身

である。

一八 内愚外賢

そこで思ひ出すは聖人が『愚禿鈔』の初のお言葉に、賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はす。

賢者の信は内は賢にして外は愚なり。

愚禿の心は内は愚にして外は賢なり。

賢者は眞の善知識、法然上人のことを仰しやつたのである。法然上人は自ら愚癡の法然坊、十惡の法然坊と外何處までも我々に同じて愚を現じて下されたけれども、内明に斯く大勢至の眞智を藏して我々を御導き下されて居るのである。爾るにその御手引きを蒙る親鸞の身は『是非知らず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり』外賢善精進を現じて居るけれども、内は彌々以て淺間しき。この淺間しきを捨てぬとの大慈大悲の眞實でましますのが有難いと、即ちそれだけ自身は何處迄も罪惡の身であることを慚愧懺悔してお出でになるのである。猶ほ『同鈔』上卷、他力自力二機對論の處には

信疑對、賢愚對、善惡對、正邪對、是非對、實虛對、眞僞對、

を以てお導き下されたのである。地獄は必定すみかの私を何處迄も見捨て給はざる大悲の眞實を、面の當り自身に現じてお示し下されたのである。『歎異鈔』を拜見する者、斯の法然上人の仰せが、直に佛の仰せであることが分らぬと二章の意義は分らぬ。二章は『念佛は極樂参りの種である、イヤ地獄へ墮ちる業である』と、それは法門の沙汰である。その沙汰はするもの、そのする残らずが暗黒の所爲で『地獄は一定すみかぞかし。爾るにその仕方ない者であることを悲憐して、その者をば何處迄も捨てぬの大悲の眞實でましますことを、面の當り法然上人より身を以てお知らせ蒙つてみれば』『さればたゞ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなりと。』思ひ固めるは、固めずには居れぬ先方が現に偉大な眞實で向うて下さることを知るからである。それ知らざるゝと、善からうと惡しからうと、その廣大なお眞實に手をとられて何處々々までも聖人のお供させて貰ふばかり、外に別の仔細は無い。已上は聖人が法然上人の仰せを頂かれた味ひを頂かせて貰つたの

と、斯のやうにお書きになつてある。この時は先きいふ絶對善と相對善の二機對論であつて、この時にはこのお見捨てなき御眞實が、當に善であるのみならず、この仕方の無きをお見捨てなき御眞實であることを頂いた信心が善であると仰せられ、まだそれが頂けず定散に止つて居るが惡だと仰せられるのである。眞の他力の恵みを頂いたのが正で、まだ自力の残つて居るのが邪だと仰せられるのである。けれどもこは他力自力の對の場合に於てであつて、彌々ひと度びその廣大なる眞實であることに、夜が明けさせて貰うて見れば、その自分は却て何處々々迄も一善の無き、何處迄も惡性の止まぬ——即ち下卷の内外對に於ては

内外道外佛教、内聖道外淨土、内疑情外信心、内惡性、外善性、内邪外正、内虛外實、内非外是、内僞外眞、内雜外專、内愚外賢、

と、斯のやうに仰しやつてあるのである。即ちこの自分分は彌々以て内外道、内惡性の恐ろしき心中を持つて居て、而も表には他く迄外佛教、外淨土、外信心の賢善精進を現じて居る淺間しき者である。爾るにこの不實に呆れさせられざる御眞實、この御眞實を知らされ

てみれば、今日までこの性分で居て『あれが善い、斯れが悪い』を思つたも、残らずが『地獄は一定すみかぞかし』爾るにこの者が之を御見捨てなき大悲大悲に遇ひ奉つたのが、之が『拯濟無邊極濁惡』の絶對善に救うて頂いたのであると、之が聖人の絶對信の有様であらせられるのである。このことを『歎異鈔』で頂けば即ち三章の

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。

他力をたのみ惡人が最も往生の正因であるといふお言葉となるのである。

併し茲は吳々も惡人が惡みで飽き足つた處が肝腎である。唯惡しき者といふばかりでは意義を爲さぬ。その惡しき者に腹一杯飽かしめやうといふお慈悲故、之を頂かすに何うするものかとなるのである。茲で能く古から動ともすれば『惡いまんま』といふことをいふ。

『惡いまんま』では邪見に墮ちる。敢て可かぬとは言はぬが、その者に與へやうの思召の深きを聞かず、友人

が引き受けやうの親切の深きを頂かすしては勿體無いことであると、茲で聖人は信の一念を仰しやつてあるのである。そしてその深きを彌々知らせて貰うた一念には、

親鸞は弟子一人もまたそこをおほせられ候ひつれ。そのゆゑは如來の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかはなにををしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり。さればとも同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきておほせられたり。(御文)

御同朋御同行は惡人が惡みに心飽き足つた處の味ひである。この者が『眞の佛弟子』であるといふお示しなのである。(已上)

眞佛顯現の本源

『眞佛土卷講話』一、二、

近 角 常 觀

第一 講 (前二續ク)

七『大悲の誓願に酬報するが故に』

然ればその眞佛、眞土は何より来るか、となりて次には、

『然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に、眞の報佛土と曰ふなり。』

今年度の講義はこの一言さへ聞いて頂けば充分なのである。『大悲の誓願に酬報するが故に、眞の報佛土と曰ふなり』は、この惱みに充つる私共、大悲大悲の眞實をもて、その苦を救はんとする御心より、その大悲大悲が塊り、報ひ、顯はれたのがこの佛土故、眞の報佛土

と曰ふと、茲を頂かして貰ふ外に無いのである。大悲の誓願など言ふと平生聞き慣れて居る故、斯ういふ言葉承はりても左程にも響かぬも、若しこの大悲の遺る瀬無きが無りせば、この佛の顯現して下さるといふことは無つたのである。この大悲一つが本でこの佛も土も現れ来て下されたの故、すると肝腎はこのお見捨て無き大悲の恵み一つが塊り、報ひ、現はれて、茲に眞佛、眞土として現前して下され、その眞佛、眞土の眞實一つで、この三途懃苦の巷に在り、永劫失望に終らなければならなかつたのだが、不思議なる哉、その

光、その恵みを聞くことにより、解脱を蒙ることをえ
て、眞の安心をさせて貰ふことを得ると、斯ういふこ
とになるのである。

茲はまた『正像末和讃』のお示しには

超世無上に攝取し、 選擇五劫思惟して、

光明壽命の誓願を、 大悲の本としたまへり。

有難き和讃である。この光、壽無量の本願を大悲の根
本として顯現して下された、眞佛、眞土の恵みでまし
ますとである。この恵みで向うて下されたで無き限り
我々この苦惱の世にありて煩惱に迷ひ、争ひに疲れ、
生死海に漂ひ、逆も助りやうは無つたのである。然る
にその助りやうが無いのを見て下され、その無いのが
捨てられぬといふ、その御眞實ばかりが塊り、酬ひ、
現はれて下さるが、光、壽無量の報佛、報土でまし
ますとである。

處で報佛報土との如き言は、概念に就て少し考えて
置かねばならぬ處がある。斯ういふことは我々専門に
學問として研究した者の外に然ういふ誤解もあるまい
けれども、我々専門にやつた者になると、信仰味より
も先き概念を運んで仕まふ癖がある。故にこの報佛、

も、その眞の恵みばかりの塊りの國が眞土である。そ
の眞佛眞土の眞實でましますことを、知らせて貰ふ一
つが肝腎である。それ知らさるゝ處で初めて安心を得

第 二 講

一 光明壽命の願

『既にして願有す。即ち光明壽命の願是れなり。大經
に言はく、設ひ我佛を得たらむに、光明能く限量有
つて、下百千億那由他の諸佛の國を照さるるに至ら
ば、正覺を取らじと。又願に言はく、設ひ我佛を得
たらむに、壽命能く限量有つて、下、百千億那由他
の劫に至らば、正覺を取らじと。』

前講にも申した聖人の和讃に、

超世無上に攝取し、 選擇五劫思惟して、

光明壽命の誓願を、 大悲の本としたまへり。

光明無量、壽命無量の本願を以て、大悲の根本と仕て
下された。根本とするとは何うかといふに、『超世無

報土などにしても、『ウン、あれは本願より報ひ現は
れたといふことだ』と、直ぐそれ丈けのことに了解し
て仕まふのである。そしてそれが何かハッキリしたも
のでゝあるかといふに、否、唯そう思うて居る丈けの
ことなのである。恰も設計技師が家でも建てる筋道で
あつた位にしか考へて居らぬのである。斯ういふこと
が、一般にはあるまいけれども、我々の間にはある。
之が大きな間違ひで、本願から報ひ現はれたといふ
は、然ういふ物の出来上つた筋道のことで無い。遣る
瀬無き慈悲の現れ、塊りとのことなのである。お見
捨てなき慈悲、眞實ばかりの塊り、現はれの方が佛と
のことなのである。茲は非常に大事なことで、現に私
の書物を讀まれた方は御承知下さる如く、私自身が苦
しんで行き詰つた時は、その如何にしても隔ての止ま
ぬ、その仕やう無き私に對して、その仕方の無きを斥
けず、何處迄もそれに呆れぬの無碍の慈悲はかしで塊
つて、私に向つて下された方が佛と、茲に氣がつい
て私は安心させて貰つたのであつた。すると眞佛、眞
土といふことにしても、私共一人々々がその眞の佛、
眞の土に遇はせて貰ひ、——眞土といふことにして

る、その肝腎の『眞佛土卷』となつて來るのである。
成る可く簡潔に申上る積りで、矢張り何うしても長
くなつて仕まつた。

上に攝取し、選擇五劫思惟して、——常にいふ阿彌

陀佛の本願は、超世無上の本願である、選擇五劫の本

願であるといふのが茲なのである。

五劫思惟の本願、超世無上の本願であるといふ、そ

のことの要は何處に在るか。といふに、諸佛の本願で

は到底助かり得無い、望み無きに向はせられ、今阿彌

陀佛の本願は、その助り得無い、罪の深いのが可哀相

故、その者を何處迄も捨てぬの眞實ぞ！ とのことが

選擇五劫の本願、超世無上の本願とのことなのである。

即ち今佛は無量壽無量光。その諸佛に超出した絶大の

光、壽として顯現して下された。それは何かといふに

諸佛の光明を以ては助り得無い、その助り得ないを哀

れむ親の眞實を以て、其の者を何處迄も捨てぬの大慈悲心の顯現ぞ！ とのことが、それが超世無上の本願といふことであり、五劫思惟の本願といふことであるのである。故に彌々我々の心に頂く要の點となると、いつも違つたことがあるので無い。我々人間力では仕て見やうなき、その仕て見やうなきを哀はれみ、仕て見やうなきをお見捨てなきお眞實故、——換言すれば、仕て見やうなき爲に遣る瀬無きお慈悲故——茲は『歎異鈔』のお言葉では

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。

(三章)

煩惱具足の我等は、如何なる行にても生死が離れられぬ。『その離るゝことある可らざるを哀れみ給ひて、』その者に最後まで呆れぬの御眞實にてましますといふ、茲一つを頂くことが肝腎なのである。問題はいつも茲一つに集中する。前講の不可思議光如來でも、無量光明十でも、乃至今の超世無上でも、光明壽命でも、

二 清淨、歡喜、智慧光佛

『是の故に無量壽佛は、無量光佛、無邊光佛、無碍光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。』

こは『大經』の註釋、興懷師の『述文讀』に、この一々につき解釋がせられてある。それがこの巻の後の處に擧げてあり、また曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』文も出て來るから、それで言はうと思ふも、日夕拜讀される『和讃』で頂くと、

智慧の光明はかりなし、有量の諸相ことごとく、光曉かふらぬものはなし、眞實明に歸命せよ。

は無量光佛である。智慧の光明量なき無量の光明の故に、限りある有量の諸相は悉く救はれ、有限の私に呆れぬ無限の眞實の故に、如何な有限の奴も恐入り、満たしめられるのである。

解脱の光輪きはもなし、光觸かふるものはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覺に歸命せよ。

之は無邊光佛で、解脱の光輪邊際なきお慈悲の故に、この光に値ふ程の者は、皆な善し惡し、相對五分々々

斯く如何なる行にても仕て見やうなきを哀み給ひて、

その者を捨てぬの大慈悲の發現の本願なれば、そのお眞實が超世無上の本願、選擇五劫の思召。それが發したのが光明無量の願、壽命無量の願、その境り、現はれが無量壽、無量光の御姿と、斯ういふことになるのである。即ち今その廣大の御眞實から、『超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して』大慈大悲の根本として起して下されたが、この光明壽命の願である。そしてその思召が、終に我々の罪深きに勝ち、如何なる暗黒をも照す光明のお姿として成就し、現はれ下されたが次の願成就文と。故にこれらの一々に、その御眞實の有り丈けが、いつも残らず表はれてあるわけである。

『願成就の文に言はく、佛阿難に告げたまはく、無量壽佛の威神光明最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶこと能はざる所なり。』

威神光明最尊第一は、佛の光明が我々に加被して下さる廣大の威神力は、最尊第一にして、諸佛にもそれ／＼光明あるが、諸佛の光明の及ぶ能はざる處を見やうとの光明故、諸佛に超越した無上殊勝の光明でましますのである。

から離され、大安慰を得せしめられる。

光雲無碍如虛空、一切の有碍にさはりなし、光澤かふらぬものぞなき、難思議を歸命せよ。之は無碍光佛で、佛の光明は無碍なること虚空の如く、如何なる有碍にも碍る處がない。虚空の物を入るゝが如く如何なるもの、有りともあるものが受入れられ、攝取の光益を蒙らしめられる。

清淨光明ならびなし、過斯光のゆへなれば、一切の業業ものぞこりぬ、畢竟依を歸命せよ。

清淨光明對無き無對光佛の絕對光明の前には、如何なる惡業を以つてもその光明を障ふことは出來ず、却つて反對に、如何なる惡業もその光明の前には融かされ、恐入らされて仕まふ。

佛光照曜最第一、光炎王佛となづけたり、三途の黒闇ひらくなり、大應供を歸命せよ。

威神光明最尊第一なる光炎王佛の照曜には、如何なる人生の黒闇も開かれ、解決され、救はれて仕まふ。

次の清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛は、清淨光は我々の貪欲を、歡喜光は我々の瞋恚を、智慧光は我々の愚癡を、亡ぼして下さる處の光りである。之等の光を

持ちて我々の貪欲、瞋恚、愚癡に呆れず、飽く迄見捨てなく照し下さる慈悲の光明の故に、この光に値ふことによりて、如何な三毒の私も救はれる。猶ほ詳しく言へば清淨光は欲ある私に、その欲あるが哀れ何處までも欲を離れた清らかな心で向うて下さるお眞實がこの清淨光であり、歡喜光は瞋る心の私に、その怒が止められぬが哀れ何處迄も瞋らざる歡びの心を以て、飽くまでも和げ、なだめて下さる眞實が歡喜光であり、智慧光は愚癡の止まぬ私に、その止まぬが哀れと、其者に呆れざる眞實の智慧をもて向うて下さるあなたのお慈悲が、この智慧光なのである。故にひとたび斯くこの者に、飽くまで呆れざる眞實を以て向うて下さるがこの光明のお心なることを知る時は、如何な三毒の私も、その思召の深きに融かれ、悦服して、その三毒を奪り上げられて仕まはずにあれぬ、となつて来るのである。

全體今回は成る可く實際問題の上にも交渉を以て話して行き度いのであるが、抑々この他力の教は、一面人生に超絶して居る如くで居て、一面實際人生に極めて直接した教なのである。それは現在斯くこの三毒心

『五劫思惟も親鸞一人が爲め、兆載永劫も親鸞一人がため』と、五劫と言はうが、永劫といはうが、皆な自分一人の上に聖人は頂いてお出でになるのである。湯を飲みて熱い、水に觸れて冷い、自身に觸れたればこそ、熱いも冷いもわかる。彌陀の五劫永劫も、自身がこの觸れた處の味ひで無ければ何もならぬ。

三 平和問題解決の妙案

爾らばその觸れ處は何所であるか、今の三毒でいふならば、此方が貪欲でゆけば相手も貪欲で来り、此方が争ひで行けば先方も争ひで来ると、斯うなつて居るのが我々現實の狀である。社會、思想問題といはうが矢張り問題は何處までもこの相對闘争で、此方が利益を取るとなれば、先方も矢張り取るとなり、斯くして相對斗争であることが、彼奴が／＼で次第に著しくなつたのが、今次の世界の動亂、西洋文明の破綻である。問題は斯くの如く至つて簡單である。それは成る程文化が進んで機械も緻密になり、科學の研究も深くなつたとは言へやう。併しそれが一方が潜航艇を用うれば片方はそれを打つ大砲を作るといふ具合に、飽くまでも相對的に働いてゆくばかりであつて、終にそれで動

で苦しんで居る御同やうが、如何にしてこの苦惱より救はれるか。斯く欲ある私に飽くまで欲無き無貪の清淨を以て向はれるが故に、如何な欲の奴も飽き足つて仕まうて、その欲を抜かれ、如何に瞋恚に燃えて居る奴も、その瞋恚の火炎に歡喜のよろこびを以て向はるゝが故に、如何な火炎も消されて仕まふと、その如く斯く偉大な清淨、歡喜、智慧の光を以て顯はれて下されは、私の仕方無きその三毒を哀れみ、その三毒を捨てぬとの大悲の眞實の結果であることを思はなくてはならぬのである。茲は余程氣をつけなくてはならぬのである。

兎角私共親鸞聖人の教を頂くに、五劫思惟の本願とか、兆載永劫の修行とか、然うした言葉を聞くと、何か古き歴史話でも話されてるやうの感があつて、實際生活とは離れて思ひ易い弊がある。従つて眞宗の佛は五劫永劫の眞實で顯はれて下されたと話されても、何か歴史話でも聞く氣になつて、自身の上に頂くことが甚だ薄い。そこは聖人御自身のお言葉で、頂くと、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。云々。

けなくなつたのが今日世界の現状と言つてよい。抑々斯くの如き世の中に、一體何う處すればよいのであるか。此方から争ひで行けば先方も瞋つて向ふばかりで問題はいつまで経つても解けるといふことが無い。今佛の五劫思惟の本願なることは、即ちこれに對する御思案とのことなのである。

極言すれば『この思想混雜の歐洲の時局を鎮定する。茲に一つの妙案がある』——亞米利加の大統領はじめ世界の人が集つて平和を考え惱んで居る處へ『茲に一つの案がある。』『何か』五劫思惟の本願であります』と、私から言へば言はなければならぬ處の、之はそれ程實人生に影響を持つ偉大なることなのである。

故に五劫の時間もかゝらなければならぬわけ、即ち五劫の思惟は、然ういふ處へ平和を來らす處の案なのである。それは相手も怒りで來るからといふて、此方もそれでゆくのでは、いつ迄経ちても駄目である。よし、怒り、憎み、争ひの人間は、如何に怒りて来り、欲で來やうが、此方は何處迄もそれで無いとこでやるぞ。此方は何處迄も其者に無貪の清淨、無瞋の歡喜、無癡の智慧にて、その三毒の惱みの者が、その毒を和

げられ、融かされ、飽き足つて、恐入り、頭下げる迄この眞實で仕續けずには止まぬぞとの、この廣大御思案でましますことが、之が五劫の本願なることなのである。

四 凡ては性分を見て下された結果なり

私が苦しんだ時も矢張り茲へ來たのであつた。初めは人に善し惡し思うて居たのであるも、仕舞ひには『人を彼是れ思ふことで無い。此方から疑ふから人も疑ふのである。すると斯く人を疑ひ、隔て、争ふこの心の止まぬのが惱みの本である。この心を如何にすべきか。この心さへ止められれば』と、こゝ迄は自分でも思つたのであつた。思つたもその心が止まらぬに私は行きついて仕まつたのであつた。

何うも信仰上の話は半分聞きが多く困るのである。斯く聞くと茲で斯う思はれる方は有るまいか『それでは人に惡しくせられても惡く思はぬやうにすればよいのである。そうすれば平和にゆくことが出来る』と、それが出来れば何も問題は無い。爲ればよい迄は分るも、それが得出来ぬのである。然うする以外に道の無いことまでは分る。それは争ひと争ひとはいかぬ、

方よりは下手に出て争はず、如何に食欲で向つても、その向ふ性分に哀みを持ちて、欲を離れて向つて下さる眞の同情に遇ふならば、如何な争ひ深き私も、此方より止められるでは無けれども、此方より出る惡しき心が、その慈悲の爲には和げられ、如何な三毒の煩惱も、終にはその眞實の爲にはとられて仕まふで無いかと申すのである。即ち其の如くして私を救はんのお心が五劫思惟の眞實で、それよりその通り誓つて下されたが光明壽命の願。そうしてその結果その通り現はれて下されたが清淨、歡喜、智慧光、而してそれ全體が眞佛土となつて來るのである。人生この恵みに救はるゝでなき限り、この争ひの世の中に、問題の解決するといふ期は無い。人生平和の根源は、實に天地の間に唯これ一つ。私共一人々々がこの恵みに救はれ、各自がその三毒の心をこのお慈悲に和げられ、亡はされてゆくといふ、これ唯一つが人生平和の基礎である。猶ほ先きにいふ處の『和讃』には、この清淨、歡喜、智慧光の處は、

道光明朗超絶せり、
清淨光佛とまうすなり、
ひとたび光照かふるもの、
業垢をのぞき解脱をう。

争ふ者に争はぬやうにすればよい。案は立派に立つ。けれども矢張り出来ぬと、そこで問題は再び行き詰つて仕まふのである。

すると茲で話を引つくり反し『斯く如何なる争ふ者にも私の方より争はず、自分の方より何處迄もやめて平和を實驗するやうにされれば問題は無けれども、それが如何せん一分も一厘もされぬとすれば、問題はもとゞで、矢張り何とも仕やうが無い。併し然ういふ争ひ深い私に』——この度びは茲で反對に——『私の方はその心で何程怒り、食ひて行かうとも、それが如何にしても私が止められぬ處を見て呉れて』——茲は初めから然うして呉れる人があるのでは無い。唯如何せん私の方はそれ程止めやうと思つても、それが止まらぬは『あれは彼が性なからである』と、この私の性分を見て下さる處からである。『見た上はその性の者に、その性を止めよと言ふたとて、それは言ふ方が無理である。無理と見る上は宜しい、如何にその性分で争ひで來やうが、愚癡言はうが、永く我はその止められぬ處を見てやるぞ』と、斯く止められぬ處に涙を持ちて呉る人ありて、此方が何程瞋りて向うてもその者に先

慈光はるかにかふらしめ、
ひかりのいたる處には、
法喜をうとぞのべたまふ、
大安慰を歸命せよ、
無明の闇を破するゆへ、
智慧光佛となづけたり、
一切諸佛三乘衆
ともに嘆譽したまへり。

五 身 意 柔 軟

次に不斷光佛は『和讃』には

光明てらしてたへざれば、
不斷光佛となづけたり、
開光力のゆへなれば、
心不斷にて往生す。
此方は背く奴を、
哀れと斷えずに照らして下さる處の
光明である。

光佛測量なきゆへに、
難思光佛となづけたり、
諸佛は往生嘆じつゝ、
彌陀の功德を稱せしむ。
斯くの如き廣大な光明は、
意外とも思ひがけないとも、
眞に人間の知識を絶した難思光佛の恵みである。
神光の離相をとがざれば、
無稱光佛となづけたり、
因光成佛のひかりをば、
諸佛の嘆する處なり。
到底我々の言語では稱えも表はしもならぬ光明でましますのが無稱光佛である。

光明月日に勝過して、
超日月光となづけたり、
釋迦嘆じてなをつきず、
無等等を歸命せよ。

日月も何物も、到底比べにならぬ超日月光の偉大なる
恵みでましますのである。

次には

『其れ衆生有つて斯の光に遇ふ者は、三垢消滅し、身
意柔軟なり。歡喜踊躍して善心生ず。』

御同やうに斯く三毒の毒を持ちて苦み惱む所に、斯の
廣大な光明の慈悲に遇ふことにより『三垢消滅し、身
意柔軟にして』——此方は欲深く怒猛き者なれども、
それを哀はれむお眞實の偉大なるを聞けば、身も意も
和げられ、柔軟になる。之は此方が柔和忍辱にならう
と思つてなれるので無い。『歎異鈔』には

わろからんにつけても、いよ／＼願力をあふぎまい
らせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろも
いでくべし云々。

哀はれむお慈悲の深きを聞くことにより、身意柔軟に
なり『歡喜踊躍して善心生ず』——自から驚かんばか
りの歡びが現はれ、善心が起つて来る。それは此方の
心に善心があるでは無けれども、佛のお眞實心が届く
によりて、私の心に佛のお眞實心が現はれて下さるの
である。

彌々になつて死後初めて眞解脱を得させて貰ひ、この
度びは眞佛と一體にならしめて頂くのである。『和讃』
には、

無上上は眞解脱、

眞解脱は如來なり、

眞解脱にいたりてぞ、

無愛無疑とはあらはるゝ。

六 諸佛囑譽

次には

『無量壽佛の光明顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀
して聞へざること無し。』

無量壽佛の光明は赫々、顯かであつて、十方諸佛の國土
に聞え無い處とは無い。茲は先きいふた處の『和讃』
には『光明てらしてたへざれば、不斷光佛となづけたり、
聞光力のゆへなれば、心不斷にて往生す』斯く光
明を聞くのである。光明なら見るとあつてよささうであ
るも、聞くところからは、或は聲を見ると言つてもよ
いかも知れぬ。見るとも、聞くと、味ふとも、光明
に接觸するとも、如何やうにも言ひ得る。要するにこ
の言葉は直き／＼お慈悲に遇はせて貰つた處を仰しや
つたのである。殊に眞宗にては聞くが著しきことにな
つて居て、それは照らされ、接觸し、遇はせて貰ふの

『若し三塗懃苦の處に在りて、此の光明を見れば、皆な
休息を得て、復苦惱無けん。壽終つて後皆な解脱を
蒙る』

有難き御文である。三塗懃苦はこの人生生活の間で
ある。眞宗の教は決して死んでからの安心では無い。
この人生『三塗懃苦の處に居て、此の光明を見れば』で
ある『見ば』は何も形の佛を眼で見奉るので無い。佛
の心光を心に頂かせて貰ふのである。心にひと度びそ
の光明の偉大なるを見させて貰ふと『皆な休息を得て
復苦惱無けん』——苦惱の人生に居て苦惱ありながら
心がらく／＼と初めて大安慰を得、復苦しみこと無く
して下さるのである。『壽終つて復皆な解脱を蒙る』は、
私は前講に於て、我々の往生が定まるは信の一念でだ
とお話した。併し唯それ丈けだと現在丈けになつて死
後は何うなるかの問題が起つて来る。成る程一念にそ
の廣大のお慈悲で恵み中に攝取さるゝには違はぬが、
そしてその一念に廣大のお心に一味にして、現生に正
定聚不退轉には違はぬが、併しこの人生に身體を持つ
て居る間は、未だ眞の解脱には至ること出来ないのだ
である。現生に一念にお慈悲に値はせて貰うた處の者が

には違はぬが、それは正しく

善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得れば、
そのときをもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし。

(執持鈔)

聞かされたればこそ、その光明に遇ひ奉ることも得る
の故、眞宗にては聞其名號の聞の字が大切になつてゐ
るのである。即ち阿彌陀佛の光明威神巍巍殊妙なるを諸
佛がお説き下さる、それを聞くことが肝腎になつてゐ
るのである。

『但我今其の光明を稱するにあらず、一切諸佛、聲聞、
緣覺、諸の菩薩衆、咸く共に嘆譽すること亦復是の
如し。若し衆生有つて、其の光明威神功德を聞いて
日夜に稱説し、心を至して斷へざれば、意の所願に
隨て、其の國に生るゝことを得て、諸の菩薩聲聞大
衆の爲に、共に其の功德を嘆譽し稱せられむ。其れ
然して後佛道を得る時に至つて、普く十方の諸佛
菩薩の爲に、其の光明を嘆せられむこと、亦今の如
くならん』

それ衆生有つてこの光明の威神功德を聞いて、日夜
に稱説して喜ばして貰へば、阿彌陀佛の國に生るゝこ

とを得、佛道を成ずることを得て、その光明を稱讃を蒙ることも亦今の如くである。

『佛言はく、我無量壽佛の光明威神巍巍々殊妙なるを説かんに、晝夜一劫すとも尙ほ盡すこと能はず』

極り無き光明の狀が、もうこの邊の一言一句に現はれである。一々には言はぬ。先きいふ聖人の十二光佛の『和讃』は、之等の御文により書いておいでになることは言ふまでも無い。

『佛阿難に語りたまはく、無量壽佛は壽命長久にして、勝計す可らず、汝寧ろ知らんや、假使十方世界の無量の衆生皆な人身を得て、悉く聲聞緣覺を成就せしめて、都て共に集會して、思ひを禪にし心を一にして、其の知力を竭して百千萬劫に於て、悉く共に推算して、其の壽命の長遠の數を計へんに、窮盡して其の限極を知ること能はじと。』

無量壽佛の壽命長久は計量することが出来無い。設ひ十方世界の無量の衆生に悉く人身を得せしめ、有らゆる知力を竭くさしめて、百千萬劫の間計算させても、逆も長遠の數は窮め盡くすることが出来ないものである。猶ほ之より各種の『大經』の異譯の經を舉げさせられ、

である。また超越の意味にする時は、順序で頂くので無い、聞く一念に速疾に超越させて貰はれるのである。また茲の『速疾に超えて便ち安樂國』の意味にする時は、一念にこの慈悲を頂かせて貰つて居るが故に、命終ると速疾に往生して佛にならせて貰ふことが出来るのである。聖人は『歎異鈔』に

念佛していそぎ佛になりて、云々。(四章)

といふ具合に、頻に『いそぎ』と仰しやつたは、命終ると速疾に參らせて貰はれるお淨土だからである。併しその速疾に參らせて貰はれるは、平日速疾に超越させて下さる慈悲でましますが故であつて、故に聖人はこの慈悲のことを『横超の直道』とも仰しやつてある。又『信卷』には

大願清淨の報土には、品位階次を云はず、一念須臾の頃に、速疾に無上正眞道を超證す。

とのお言葉もある。

『佛説諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經』友誼譯に言はく

之も『大經』の異譯で、御承知の如く『大經』の下卷には人道を説いてある處がある處から、斯く人道經の名も

(異譯が多いは原文にも種類があつたからである) 光明、壽命の奇特殊勝の様を書いてお出でになる。一々に頂けば極りなき味ひであるも、大體の處で進んで行くがよからうと思ふ。

七 『異譯』光明讚歎の文

『無量壽如來會に言はく、阿難是の義を以ての故に、無量壽佛に復異名有す。謂く、無量光、無邊光、無著光、無碍光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不可思議光、無等不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光なり。光明清淨廣大にして、普く衆生をして身心悅樂せしむ。復一切余の佛刹の中の天龍夜叉阿修羅等、皆な歡悅を得しむと。』

『無量壽如來會』は即ち『大經』の異譯の經である。無量光以下は即ち先きの十二光佛が斯ういふ風に茲には出て來たので、一々に就きては言ふ用もあるまい。

『無量清淨平等覺經』に言はく、速疾に超て便ち安樂國の世界に到る可し。無量光明土に至つて無數佛を供養すと。』

之も『大經』異譯の經である。茲はどちらからでも言へるも『速疾に超えて』は、頂く信の一念が速疾なの

出て來たのである。

『佛言はく、阿彌陀佛の光明最尊第一にして、比ひ無し。諸佛の光明皆な及ばざる所なり。八方上下無央數の諸佛の中に、佛の頂中の光明七丈を照す有り。佛の頂中の光明一里を照す有り。乃至佛の頂中の光明二百萬佛國を照す有り。佛言はく、諸の八方上下無央數の佛の頂中の光明、炎照する所皆な是の如し。阿彌陀佛の頂中の光明炎照する所、千萬佛國なり。諸佛の光明の照す所に近遠有る所以は、何むとなれば本其れ前世の宿命、道を求めて菩薩爲りしに、所願を照すに功德各自から大小有り。其れ然して後ち佛を作る時に至つて、各自から之を得たり。是の故に光明轉同等ならざらしむ。諸佛の威神同等なるならくのみ。』

斯く諸佛の光明に種々がある中に、阿彌陀佛の光明が殊に超越して勝れてある譯けは、もとそれらの佛が菩薩として道を求められた時に於て、その所願に大小があつた處からである。今阿彌陀佛の光明が諸佛に勝れてある故は、もと菩薩の行を行し給ひし時、その思ひ立つて下された處の本願が他と超絶して、不可思議廣

大の本願でましました處からである。

『自在意の所欲、作爲して豫め計らず。阿彌陀佛の光明の照す所最大なり。諸佛の光明皆な及ぶこと能はざる所なり。佛阿彌陀佛の光明の極善なることを稱譽したまふ。阿彌陀佛の光明は極善にして、善の中の明好なり。其の快きこと比び無し。絶殊無極なり。』

阿彌陀佛の光明は清潔にして瑕穢無し、缺減無し。清かであつて一點の瑕も無く、一點の缺くる處無い。

『阿彌陀佛の光明は殊好なること、日月の明よりも勝れたること、百千億萬倍なり。諸佛の光明の中の極明なり。光明の中の極好なり。光明の中の極雄傑なり。光明の中の快善なり。諸佛の中の王なり。光明の中の極尊なり。光明の中の最明無極なり。』

こゝらは名高い處の文である。一口にいへば、心も言葉も絶え果てた絶對の廣大なる光明でましますとである。

『諸の無數天下の幽冥の處を炎照する、皆な常に大明なり。諸有の人民蜎飛蠕動の類、阿彌陀佛の光明を見ざること莫きなり。見るる者慈心歡喜せざる者莫けん。』

して、復治することを得ざれども、死して後、憂苦を解脱することを得ざる者莫きなり。』

泥梨は地獄、獢狖は畜生、辟劫は餓鬼。それにすれば考掠は即ち修羅になり、勤苦は人間になる。その者がこの廣大の光明を聞かざるれば、その偉大なる御眞實の爲に苦惱を取り上げられ、『休止して、復治することを得ざれども』——これが有難い。治すると言ひてもよろしきも、それなら腹立たぬやうになれるのか。この世に在る間はなれぬの故、復治することを得ざれども、『死して後憂苦を解脱することを得ざるは莫し、生命了れば眞解脱に至つて、眞の救を得させて貰ふことを得るのである。』

『阿彌陀佛の光明と名とは、八方上下無窮無極無央數の諸佛の國に聞えしめたまふ。聞知せざるは莫し。聞知せむ者、度脱せざるは莫きなり。佛の言はく、獨り我阿彌陀佛の光明を稱譽するにあらず、八方上下無央數の佛、辟支佛、菩薩、阿羅漢、稱譽する所、皆な是の如し。』

獨り大聖釋尊が稱譽讃歎なさるばかりで無い。ありとある十方諸佛が皆な讃歎なさる。

幽冥の處は暗い處である。如何なる暗室も日光の行きわたらざる無き如く、諸有の人民蜎飛蠕動の類——蜎飛は飛ぶ處の小虫であり、蠕動は即ち蠕動する處の小虫である。それらに至る迄阿彌陀佛の光明を受けぬといふことは無く、受けて歡びに充たれぬといふことは無い。茲は聖人は『口傳鈔』に

聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類、かの聖教にすくはれて、ことごとくその益をうべし。

と言ひて、その處の虫けらに至るまでが、いつかは慈悲を頂く御縁となるとまで仰しやつてある。必ずしもこの文から出たとは言へぬも、有難いお言葉だと思はせて貰ふのである。

『世間諸有の姪洗、瞋怒、愚癡の者、阿彌陀佛の光明を見たてまつりて、善を作さざるは莫きなり。』

姪洗は淺間しい欲である。瞋怒の怒り、愚癡の奴も、何處までもその淺間しきを哀れみ、呆れぬ光明には、終に呆れ、恐入りて廻心懺悔せぬといふことは無い。

『諸の泥梨、獢狖、辟劫、考掠、勤苦の處に在つて、阿彌陀佛の光明を見たてまつれば、至つて皆な休止

『其れ人民善男子善女人有つて、阿彌陀佛の聲を聞いて、光明を稱譽して、朝暮に常に其の光好を稱譽して、心を至して斷絶せざれば、心の所願に在つて阿彌陀佛國に往生すと。』

廣大のみ名を聞いて、南無阿彌陀佛々々と光明を讃歎し、至心にして斷絶なく相續させて貰へば、阿彌陀佛國に生れさせて貰ふことを得るとである。私が一々くどくど申上るよりも、茲は直接本文に就き、頂いて下された方が味ひが深い。殊に今席の異譯の光明讃歎の文は、『眞佛土卷』は全體この光明を讃歎する處に骨子があるの故、若し之がなくては『眞佛土卷』は知らせて貰へぬわけである。如何にも聖人が

諸佛如來の眞說に信順して、(信卷序文)

と仰しやつた如く、釋尊のお説き下された眞說によりて、知らして頂けるわけである。言ふ可きことは切り無しであつて、如何にも釋尊の仰しやつた如く、晝夜一劫してもゆかねわけである。(已上)

争闘と解脱

近角常観

四八

一 人生の争闘

争闘は私共人生に於ける相對争闘であり、解脱はその争闘苦惱の人間が、三塗苦惱の處に居て佛の光明を聞き、皆な休息を得て、復苦惱無けんの味ひである。一言に言へば今日の社會問題、思想問題は、畢竟するに人生の争闘たるを出ぬ。言ひ換へれば五分五分たるを出られて居ぬと思ふことである。最も之等の問題に限らず總ての問題が、人生は五分々々の争ひたるを出ぬのであるけれども、最近各種の問題が起りて、更にそれが彌々甚しく、殆ど底止するを知らぬといふ状態になつて來た。そこで初は斯く争ふことを以て得意とし、勝つた積りで精力を奮つて居た人もあらんけれども、斯く底止する處を知らぬとなれば次第にその争ひの爲に苦み、争ひ無き平和に到り度いの希望もあらうと思ふのである。けれども根が五分々々で出來て

居る人生故、それに到り得無いで苦しんで居る人も尠くなくあらうと思ふのである。斯ういふことは然ういふ社會、思想の問題よりも、更に剴切に言へば直接友人間の問題、同僚間の關係に於て、斯ういふ惱みに陷入つて居られる人が少なからうと思ふのである。即ち如何にすればそういふ争ひの惱みより救はれるかの問題なのである。

爾るに人生は五分々々であつて、何程その争ひの思ひを止めやうと思つても止められず、轉々して限りが無い。佛教に於て流轉輪廻といふことを言ふは、輪廻轉生の意味にすれば深いこともあるも、分りよくいへば即ちこの轉々限りの無いことである。こは争ひの心ばかりに限らず、親が子を、子が親を相愛する恩愛の問題にしても、その爲に互に苦がやまぬ。故に佛教に於てその恩愛を棄て、解脱するの語があるは、冷いや

うであるけれども、この苦惱より脱れ出ることを言うたのである。斯く夫れからそれへと苦しんで行く人生に。

爾らば如何にすればその苦より離れ、五分々々より脱却することを得るか。私の經驗を本として言へば、自分の方から争ひを止め、隔てを離れ、何處までも無我にして向つて行くことが出來れば、それは離れられるに決つてある。故に何人も茲で人を惡しく思はず、如何なる場合にも不足思はぬやうの修養を試みる。けれどもそれが何程努めても煩悩は盡きず、不足、隔ての思ひは止まらぬとなつて、修養の結果は明になつて來る。すると自分は然ういふ争ひ深い、我慢深い、執着強い、そういふ恐ろしいのが自分の本性であつたことが、明に現はれて來る。我々罪惡の凡夫であるといふことも、一寸思ひ難いかなれども、斯く何程争ひ、隔て無きやうにと試みて、努めれば努めるだけ彌々不足の心が著くなつて、彌々罪惡の自分であつたことが悲しくなつて來るといふわけである。そこで然ういふ自分と彌々成り果てるが。

その自分が何う安心されるかといふに、常に言ふ如

くこの度びは茲で正反對に、然ういふ隔て、我慢で向つて行く處の自分に、先方よりは何處までも我慢を離れ、五分々々を離れて、茲は此方が五分々々で造ればやる程相手も五分々々が強くなつて來る譯けである。故にその五分々々の奴には、此方が何處迄も五分々々を離れて向つてやらねばならぬと、それを自分で遣り度かつたも、終に一分も一厘も出來得無いで終つた處の其争ひ心の私に、その止まぬを見たからと他く迄も争はざる無我を以て向うて下さるとなると、茲でその私が何うなるかといふ問題なのである。更に適切にいへば、此方は争ひ心が本性の奴故、その本性を發揮して何處までも争うてゆく。すればする程その性を衰れみて益々無抵抗にされたとなれば、如何な隔て、争ひ深き我々もその無我の人の前には、感せずには居れぬで無いかといふことなのである。即ち人生に果して、斯くの如き絶對の情けを持ちて、然ういふ争ひ心の私に、向つて呉るゝ眞實の有りや無しによりて、問題は決定するわけである。そうして然ういふ私に、他く迄身を捨てた態度で争はず、その争ひ心の根を斷つまで、廣大の眞實で其の者を見てやらねばの慈

悲で現はれて下された大悲の人が、即ち聖人の言はるゝ無量壽、無量光の恵みで、即ちそれが阿彌陀如來である。それが聖人の言はるゝ五劫思惟の本願、兆載永劫の眞實と斯ういふことになるのである。五劫思惟兆載永劫など聞くと、何やら我々の實際生活と離れた教理の筋道でも聞くやうの感があるも、五劫永劫はこの隔てる私に何處までも隔てず向つて下されたお眞實が、この五劫永劫となる譯けであるのである。

二 解脫の信味

少く専門に亘るやうであるけれども、一寸茲で一言するが、全體他力の教の源は支那で善導大師の稱へられた處と言つてよい。それが日本に來て法然上人の上に現はれたといふ譯けである。その善導大師の書かれた至心の解釋など文句通りに讀むと「如來が既に我々の爲め永劫の眞實を以つて向つて下された佛なれば、我々も亦佛の如く至心の眞實を以てせねば」と、書いてあるのかと思ふ程にまで讀める。又我々としても動ともすると然う考へるのであるけれども、それで行けば必ず行き詰るばかり。何故となれば眞實にせんとすればする程、自分の眞實にされぬを發見するばかり故。

茲は人間同士の間でも、先方が眞實無きに對し、此方が最後まで眞實で遣り通うせるかといふに否。私など自分が獸身的に遣れて居ると自分で思つて居た迄に遣り抜いて、それでも人が認めて呉れぬとなつたら、人の爲ることが眞實で無いことが思へてならぬやうになつたのであつた。するとそれ程人を惡しく思

一切の群生海、無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假誑偽にして眞實の心無し。是を以て如來一切苦惱の群生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も清淨ならざること無く、真心ならざること無し。

一念一刹那の間も我々のその不實を斥けず、不實の此方に何處迄も眞實を以て向つて下さる、その眞實の塊りが如來故、如何な眞實ならぬ我々も、そのお見捨て無き眞實の爲めには此方の不實が敗れて――茲が大切である。我々には斯く眞實が無いが、眞實が無い仕まつたとは言はぬ。我々の炭は何の部分として不實ならぬは無き黒暗々たる炭であるも、その炭を捨てぬ眞實の火が一度にその炭に燃えつければ、その眞實の火は一度に炭の中心まで徹底して、如何に不實の炭も終に火にされて仕まつが、御眞實の火の味ひであると申すのである。

斯ういふことを言ひ度くなるのも、今日の青年又は思想家が、この御眞實の火に此方が救はれるのだといふことを考へて居ぬ。何か自分で骨折し發見でも仕てゆかねばならぬことのやうに思つて居る。この點に於ては眞宗の教が行き渡つて居るといふのも言葉の上支けのことで、實生活上の力としては充分で無い。お助けとは極樂に往くくらゐのことに思ひなして、この世に在る限りは悪い儘である杯と、殆ど今日は一般が炭が火にされることは考へて居無い。御眞實は斯く私の不實を救はうとのお慈悲の火でまします處が有難いのである。即ち解脫とはこの御眞實の火に遇ひ、如何な私の不實もこの御眞實には恐入り、終に眞實に同化させられた處の味ひである。それはその眞實の

はぬやう、不足に思はぬやう思つて居て、さて斯く人に不足が出て來るといふはをかしい。之は今迄身を捨て、眞實に仕て居ると思つて居たのが本統に仕て居たので無く、人に認められ度い爲、人に褒めて貰ひ度い爲め仕て居た眞實に過ぎなかつたからと、茲で今迄人に善く仕て居ると思つて進んで居つた残らずが、眞實のもので無つたことに氣がつき出した譯けであつた。故に自分が眞實にされて居ると考へて居る間は、誰もが茲の處に氣がつかぬ。故に今日喧ましき社會鬭争の問題にしても、あれが皆な自分の方が善いと考へるから、あの通り皆な遣つて居られるのである。自分の主張が正しい、眞實と、それで何處までも争つて行く狀は、彼の亞米利加のウィルソンと同じである。けれども然ういふやうに、自分が飽く迄眞實に出來て居ると思つて居たのが、本統の眞實で無つた。第一我こそ眞實々々と言つて居つたのが恐ろしき不實であつたと、茲になるともう佛の如く眞實にして行く、その道では行き難くなる。故に聖人は善導大師の文をすつかり讀み變へて仕まつてお出でになるのである。

すると私共自分が眞實に出來るといふ道は無く、爾らばそのされぬを哀んで下さる佛の眞實とは何うかといふに、斯く此方が眞實にされぬを見て、それでは可かぬと斥けられるならば五分々である。我々が何程仕やうと思つても、それが出來ぬを哀はれと了解したといふお慈悲なれば、我々が益々我慢がやまず、眞實にされねばされぬ程、其の者に彌々我慢を離れ、眞實を以て向つて下さる處の眞實である。そこは聖人の「信卷」には、

爲には、如何な不實も然うさせられて仕まつのである。するとこの争ひの人生に於て、此方より争ひが止められるでは無けれども、争ふ者に争はず向つて下さるこの御まことの爲には、初めてこの人生に於て善く惡し離れた立場を與へられ、それでやらせて貰ふことが出來る。それは寧ろその御眞實のお力の自然の顯現として、然うさせられるといふことを申すのである。これで一應申さうと思つたことは申して仕まつた譯けである。

三 人格の改變

そこで一つ私の方より問題をこしらえていふならば、斯ういふ方が最も多からうと思ふのである。「然ういふ争はざる態度で向はれる恵みと聞けば如何にも有難く、その恵みの佛には頭が下るけれども、相變らず五分々々で來る人間には、矢張りもと通りでやる外仕方が無いで無いか」と、これが能く受ける處の質問である。無理もないこと、思ふのである。

併し之では「争はぬ者には争はぬも、争ふ者には争ふ」といふことになりて、未だ我々の五分々々性を救はれたといふことにはならぬ。救ひ、解脫といふことはその如き、斯う來る人には斯う行くも、あゝ來る者にはあゝ行くといふ如きことで無く、一度この恵みに遇ふた爲め、根本的に我々此方の人格が一變させられて仕まつ、性質が改變させられて仕まつ、といふことなのである。

茲は解りよく譬を以て言へば、茲に甲乙二人の者ありて互に善し惡し争つて居たとする。其處へ第三者ありて、「争ふのはよくない、止めたら」と申し出たとせん。第三者の優しき仲裁には甲も乙も「有難うございます」と頭下けるも、御互同士は矢

張り争うて居るのなら、之で本統に頭が下つたと言へるか何うか。『優しく来る人には優しく向ふも、争ふ者には争うて行く』
『佛の恵みには頭下けるも、人間同士は争つて居る』のなら、佛の恵みで解脱されたには行かぬで無いかと申すのである。故にこの時若しやこの仲裁に出た人が厳しく出て、『全體止めよ』と言ふのに、いつ迄も争つて居るお前が悪い』と言はるれば、今度は必ず『何處が悪い』とその人にも又向つて行くに決つて居るのである。即ち斯く、優しく言はるれば優しく行き、悪いと言はるれば何處が悪いとなる。それが我々の争ひの性分だと申すのである。そこでその又向つて出たのに喧嘩を初められるのなら恵みでなければ、『イヤこの仲に飛び込んだ上は、もとより喜ばれやう筈は無い。如何に悪しく思ふとも、それを此方より一點悪しくは思はぬ。併しその争ひの性分でお前の苦しんで居るのが氣の毒故、それを救はうと思うた此方の誠意だけは受けて呉れ』と、争ふ此方に悪しく思はず、遣る瀬無く向はるゝ眞實の爲には、終に恐入りましたと、この時にはその人丈けで無い。茲の『恐入りました』は、この恵みの爲に此方の性分を一變させられ、同化させられて仕まつた言なのである。その時には一方の相手が喧嘩やらうと仕やうが、一措いて呉れ、もう懲り／＼仕た』と争ひ心の根を断れて仕まつたのが、佛の恵みに救はれたとなるのである。

と、その寒いを哀はれみ、寒いを何處迄も温めやうのお慈悲の火に遇へば、如何に氷雪はあらうが、自分はその温かさで温に居れるで無いかと申すのである。温かさに居れば如何な風雪に外界は圍れて居やうが、誰惡し彼惡しの問題は自から消失するで無いかと申すのである。

『歎異鈔』の九章は茲をお書きなつたものである。(己上)

自第一卷
至第十二卷

全三冊 上等クロース綴

久しく有志諸君より御希望に預つて居りました、求
道第壹卷より第拾貳卷に至る殘本の合本が、今回少
部數出來上りました。無理して一冊でも多く、今同少
やうと仕立てました。無集められた冊數も各個不同
で、多きは七十冊より、少きは四十冊位しか集めら
れ無つたものもあります。それも極少部數しかないの
ですが、兎に角多く集まつたのより順次にお頒ち仕
やうと思ひます。從つて定價も一定に決め難く、額
既に品切になつて居ります恐もあります故、御希望
の方は一應御照會に預つて、個々にお決めを願ひ度
う存じます。併し大體は全三冊揃ひて九圓より六七
圓見當であります。

求道

上等クロス綴 定價二圓四十錢 郵税十二錢
右は第十四卷一號以下十六卷二號迄發行した分は全
部まとまつてあります。之も極少部數でありますか
ら御希望の方は至急に願います。

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

親鸞聖人の信仰

改正定價一圓 郵稅六錢

次 目

第第第第第第第第
八七六五四三二一
章章章章章章章章
信利交招一如信序
樂他日喚佛來宗
開顯因勳名木慶
發海緣命獄願嘆言

附第第第第第第第第
十十十十十十十十
五四三二一十九
錄章章章章章章章章

眞善眞狂無配一大
宗惡化還爲佛念悲
歌攝佛何涅槃橫肉
詮跋十向衆殊超向

懺悔錄

定價卅五錢郵稅貳錢

本書には著書が人生の暗黒にぶつかつて苦しみましたことからそれが大悲の眞實に救はれ、方向一擲の信仰生活に出させられた實験から、それが王舍城悲劇、阿闍世王の煩悶得脱にあはれた佛陀大悲の眞面目であることから、著者の主眼が主として、残らず本書に盡くしてあります。著者が告白書として、著者の信仰を理解するゝには最も好適であります。

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

近角常觀著

慈光錄

再版

改正定價一圓二十錢 郵稅四錢

本書は親鸞聖人の跡を慕へる著者が、信後生活に於ける衷心の懺悔感謝の披瀝である。蓋し一念徹底の信源より顯現し來る絶對救済の眞宗教が、如何なる眞人生を開顯し來るか本書に於て遺憾なく表白されてある。幸に著者の信仰に汲するゝの士は、著者が信後に於ける最も心力を傾注せる文字として本書を心讀精讀あらんことを。

◆集金郵便◆

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り本所に於て發行の書籍は御便利集金郵便の御註文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料を加へたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一帯地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

大正十年二月二十日發行（毎月一回發行）

求道前號要目（九年十月發行）

思想問題論議と信仰的解決
假の願の意義Ⅱ『報土化土論』……近角常觀
人生最終の歸結……近角常觀
眞佛顯現の本源Ⅱ『眞佛土卷講話』……近角常觀
病床感謝の御たより

●本誌は毎月一回發行とす●誌代は總て前金拂込みのこと●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は二錢切手にて一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部卅錢 十二冊分 一圓七十錢（郵税不要）

大正十年二月十七日印刷
大正十年二月二十日發行

編輯人 近角常觀
印刷人 佐藤駒次郎

東京市本郷區森川町一帯地

發行所 求道發行所

電話（小石川一六四一番）振替（東京一六六九六番）